る農業移民の可能性は立證されたのであつた。少なくも春木銀座と自稱するこのあたりでは、

「あの時分にくらべますと、今は極樂にゐるようなもので。」

といふ言葉通りに、すつかり安居樂業してゐる風であつた。

われわれは、家の前の畠からとつて來たばかりの、新鮮なパインアップルを御馳走になつて、やがてこの村に別れをつげ、再び昨日來た道をコロニアへひきかへした。棧橋附近で、ナナラウト登山班と落ち合つて、船にかへつたのは夜に入つてからであつた。

五

內南洋の主要島のうちで、記されたるところ最も尠き島はクサイであらう。島の大きさも、ポナペやパラオに比してかなり劣るし、その行政的所屬においてもポナペ支廳に包含され、ポナペに對して從屬的關係にある。開發に關しては著しくおくれてゐる。從つて定期航路の寄航時間もごく短かく、われわれの船も、今朝入港してその日の夕方には出帆してしまつたので、われわれの視察も、その短い時間に駈足でなされたものにすぎないから、この紀行もまた從來の記述に對して、殆んど何らの追加もできないだらうと思ふ。だがその粗野な自然景觀、殆んど開發の手の入つてゐない美しい昔ながらの島の姿に、甚だ短い時間の、また甚だせまい範圍の觀察ではあつたが、われわれ自身はすつかり心を捕へられてしまつた。もし、もう一度內南洋のどこかの島へ調査に行けと言はれるならば、われわれは躊躇なくクサイを撰ぶかもしれない。

クサイは、その自然景觀においても、ポナペに最も共通したものをもつ島である。ポナペと同じく殆んど單一の島塊より成

り、ただその東岸に接して、レロの小島を伴なつてゐるにすぎない。そして船は、その兩島のよく樹木の生ひしげつた綠の岸が、熱帶に出來たフィヨルドのようにせまりよつて來てゐる極めてせまい海峽の中に、岸から手のとゞくほど近く碇泊した。ポナペにはナナラウトがあつた如く、クサイには島のほぼ中央に、フェンコル山がそびえてゐる。ただ、この島はポナペよりも開析が進んでゐるので、熔岩臺地は見られず、はるかに急峻な尖峰を形成してゐた。尖峰は一つのみではなく、港から見ると、眼前の大きい稜線の隆起につづいて、大小いくつかの隆起が右方はるかに連なつてゐて、この尖峰の一つ一つを、立膝をした膝頭、かなり離れて二つの乳房の高まり、更に顎と鼻、といふ具合に見立てて、古來の南洋の航海者の間では「處女の寢姿」とよばれてゐる。フェンコルの頂からは、放射狀の水流が、やはり所々に瀧をつくつて奔流してゐた。

森林の景觀は、むしろポナペよりも熱帶降雨林の名に値するものであるかもしれない。一見した印象からいへば、パラオ、トラック、それにポナペさへもが、それらの島々では比較的高くまで、美しい椰子林が育つてゐるせいか、どちらかといへば織目のよく揃つた美しい裳裾を見せてゐたのに對して、この横たはれる乙女は確かに野育ちであつた。ずゐ分急な斜面でも、ここでは縺れ合ふ樹木の群が、その間に密生する蔓草によつて、何重にも上下に結び合はされて、斜面一ぱいにかかる巨大な綠の瀧のように、山麓の海岸に至るまですべり落ちてゐた。未だに本格的な熱帶森林に接する機會を得ないわれわれには、この點だけでも大きい魅惑であつたといへよう。その森林の急斜面の落ちこんでゐる下に、僅かばかりの平地があつて、そこに南洋興發の手によつて農場が開墾中であつた。われわれはその農場を見學するために、まづ本島に上陸した。

この島における邦人の事業といふものは、この農場が殆んど唯一のものである。それも、つい近年になつて着手されたもので、從つてこの島には、今までの寄港地とは異なり、日本人の町と稱し得るほどのものは存在してゐなかつた。青々とすみ切つた海の中に頑丈につき出た廣い棧橋に上ると、その背後には事務所風の建物が二三棟見られるだけで、そこから、咲き亂れるウ

コンの花の淡紫色の間を、海から引き上げて間もないらしく強い磯の香を發散する珊瑚の砂で敷きつめた白い道路が、人家もない海岸濕地を横切つて、農場の方へとつづいてゐた。樓橋附近の海岸にしても、まつ白な砂濱がつづき、港としては珍らしく自然のままの姿をのこしてゐる。農場に至る道路も、少しばかりのコヽヤシ林をぬけ切ると、トビハゼがはね躍る泥の濕地と、その上をおほふかぶかとしげつたマングローヴの中に入る。道を横切つて、すぐそばの海に流入する小川の岸には、やはり深い泥の川床から、巨大な海百合の觸手のように、ニッパヤシがその葉を擴げてゐた。そして、最後にその道路の終點の農場に着いてみても、未だ朽ち果てぬ切株が幾本も、畠の中にもによつきり頭を出してゐたし、取片づけの終らぬ伐り倒されたばかりの材木が、累々と横たはつてゐて、北海道の山の中の開墾地にでもありそうな風景であつた。ただ、その間に、早くもむせかへるような草いきれを發散して、雜草がべつたりと地面をおほうてゐた。比較的雜草が除かれた部分では、胡瓜、冬瓜、茄子などの野菜の蔓が、低く地面を這つてゐる。そして、その畠のつい傍らまで、主としてカアなどといふ喬木からなる山の森林が、體一ぱいに蔓草の衣をつけて、ひしひしとせまりよつて來てゐた。

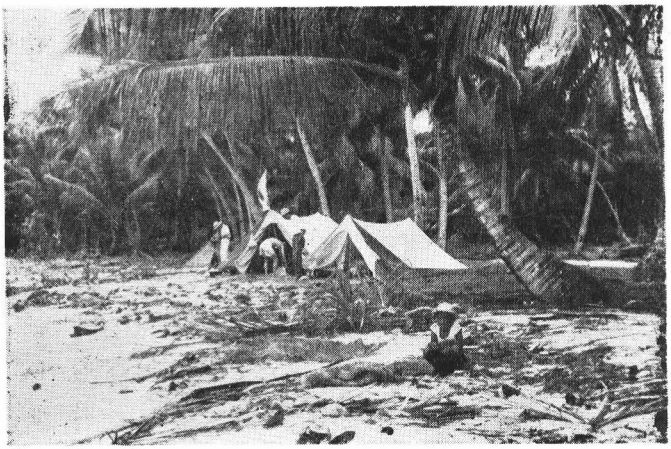
クサイ本島が、その自然景觀の粗野さと、殆んど近代の開發の手の入つてゐない未開さとによつて、クサイのもつ性格の一面を代表してゐるものとすれば、われわれがクサイ本島を離れて渡つた、對岸のレロ島は、クサイのもつ、他の對蹠的な半面を表はしてゐるようであつた。

自然の構成が類似してゐると同樣に、クサイはその歷史においても、ポナペといくつかの共通點をもつてゐる。ポナペがかつては、ナナラウトを頂點とする五つの扇形にわかたれて、そのそれぞれの地域に所謂封建的國家を形成してゐたように、クサイではフェンコル山を中心に、島はレロ、マーレム、タオンサック、ウツワの四つの地域にわかたれてゐた。自然景觀が、この島が最も未開である、と語つてゐるのとは反對に、島民自身の歷史からいへば、それはポナペとともに、內南洋中でも最

も進んだ强固な社會制度をもつてゐた。社會組織は、種々の點においてポナペのそれとの類似を思はすのであるが、事實、過去において兩島の間に相當の交渉のあつたことは確からしい。傳說によれば、この地を進發したクサイの水軍が、大擧してポナペを襲ひ、つひにマタラニームのナンマルキーの位を奪ふに至つたといふ。そして、ポナペのマタラニームにあるナンマタールの巨石文化の遺跡の起源についても、一說によればポナペ軍の防衞陣地であつたともいふ。そしてわれわれがレロの島に上陸して間もなく訪れたレロ城趾は、ナンマタール遺跡とともに、內南洋中での二大巨石文化ともいふべきものなのであつた。天空をおほふ巨大な榕樹の森に、その石造建築は、或ひは城壁の如く、或ひは廻廊の如く、かなりの廣さにわたつて展開してゐた。

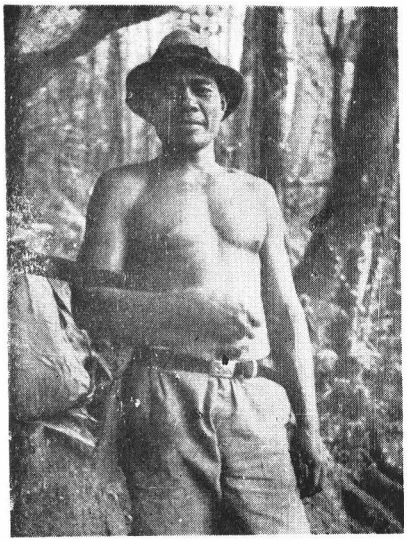
われわれはレロ島を一周したのであるが、かくの如き驚嘆すべき建築術や、大海原を獨木船にのつてポナペまで攻めて行つたといふ潑剌たる氣力は、今はどこへ失つてしまつたのか、彼等の村落はすべてを忘れてしまつたように靜まりかへつてゐた。

今でこそ開發はおくれてゐるが、また、一方ではクサイは內南洋の中でもつとも早く歐米文明の洗禮を受けた島の一つである。十九世紀初頭、アメリカ船によつて發見されたこの島は、その後間もなく南の海を暴れまはつた捕鯨船の誂へ向きの基地となり、レロ港は、ポナペのキチの一港とともに、それらの船の二大根據地の一つであつたといふ。捕鯨船にややおくれて基督教の侵入がはじまり、その方面においてもクサイは基地となり、アメリカのボストン傳道團の手によつて、一八七九年にはタオンサックの村にクサイ・トレーニング・スクールが設けられたほどである。現在においても基督教はよく普及してゐるし、早くから歐米文明の影響をうけてゐるだけに、島民たちの生活も著しく文化的で、比較的清潔で立派な家にすみ、服裝も島民ばなれのしたのが多いように思はれた。早くから外來文化の波にもまれた苦勞を、今はすつかり現象の裏側に閉ぢこめてしまつて、クサイの島民は靜かに、安らかに暮してゐる。ただ、こうした歷史の古さを頭において彼等を見ると、その面長の、

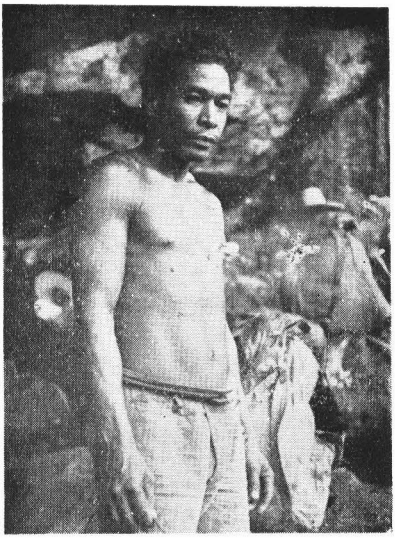


1. 海岸のキャンプ——ヤルートにて

2. ヤルート島における一行



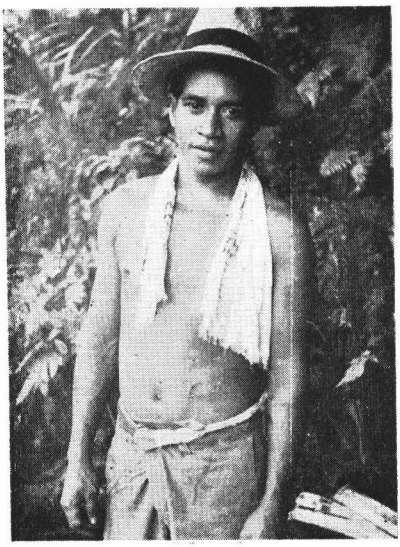
1. 島民人夫頭カテルシャン



3. 島民人夫ウリアム

2. 島民人夫アンドレアス
彼は山豚狩の名人である。手にもつはその狩獵用の木槍。

4. 島民人夫ヨアケム



色も淺い、目鼻だちの整つた端麗な容貌が、氣のせいか、そのような古い文化の傳統を語つてゐるようにも思へるのであつた。椰子にかこまれて、頂上に十字架をいただいた敎會の尖塔がそびえ立ち、その敎會の廊下のコンクリートの床の上に、柱にもたれて、すでに傾いた太陽の赤味を帶びた光に照らし出されて、うつとりと海を眺めて物思ひに沈んでゐる女の、スペイン風の古風な服を恰好よく着こなして、美しい髪をさらりと疏き流したその姿がクサイのそのような一面を表徵してゐるようにも思へて、妙に印象にのこつて離れないのである。

六

われわれの航海は東のはしに近づいてゐた。それはわれわれの航海の東のはしであると同時に、帝國版圖の東の極みでもあつた。パラオ諸島よりカロリンの大群島を經て、赤道に平行に東西四五度にわたつて蜿蜒と連なる內南洋數千の島群が、マーシャル群島に至つて、ついに終りをつげるのである。そのマーシャル群島の東には、もはやパナマ運河まで、殆んど一つの島影をも見ぬ、渺々たる太平洋が擴がつてゐる。

マーシャル群島は太平洋が大嵐になると、波浪が島々を越えて行くこともあるといふぐらゐ、低平な島々から成つてゐる。そんな事が果して何年に一度おこるかは知らないけれども、事實最近でもそのような大浪が襲來して、椰子を倒し、家を壞ち人命を奪つたといふことを、われわれは半ば傳說めいた執拗さで何處へ行つても聞かされた。海拔數メートルに過ぎぬ島、そして幅員數十メートルにすぎぬ島、しかもそのような島が或ひは長く、或ひはほんの數十メートル斷續しながらぐるりと環をつくつて、その中に大洋中の獨立の別天地礁湖を抱いてゐる。これがマーシャル群島を構成する一つ一つの「島」の概形なので

ある。マーシャルには、かような環礁が三二あつて、更にそれは、八六〇餘の礁島から成つてゐる。そしてそれらが、凡そ二列にならんで、ラタック、ラリックの兩列島を形成し、マーシャル全群島を掌握するヤルート支廳は、ラリック列島ヤルート環礁中のジャボールにおかれてゐる。

船は、八月四日の朝、ジャボールに投錨した。ジャボールは明るい町である。いや、ヤルート島自身がそうであるといへよう。それは、丁度折よくその日が快晴であつたからばかりではなさそうである。眞つ白な、さらさらした珊瑚の砂と、街の中までも生えしげつてゐる椰子の木、そして、その背景に光り輝いてゐる純白の積雲。ポナペやクサイが、その山頂にいつも雨雲をまとひ、何となく空氣が陰氣に濕つてゐることが多いのに、この島では何とからりと明るいことであらう。雨量は、統計によるとポナペが最も多く、ヤルートでは最も少ない。從つて、氣溫についてはそれとは逆にヤルートが最も高い平均値を示してゐる。

船が、クサイをすぎてヤルートに近づいた頃、はからずも、ヤルートにおける復航までの碇泊期間を利用して、島の一隅にあるジャルーチ村へ、二泊三日の遠足（エクスカーション）を試みるといふ計畫が急速に具體化したので、入港の日はわれわれは、町の見物も碌々せずに、準備と交渉に忙がしかつた。

街で晝食をすますと、直ちに、われわれを目的地へ運んでくれる支廳のランチにのりこんだ。ランチは靜かな內海を南に進んで行つた。膨大なヤルート環礁をかこむ島々が、次第に連なつて、終りは漠々たる海の中に消えてゐた。海水の色はすばらしく冴え、殊に今日は、かつと照る日が景色を一層南洋らしくして、連日の雨につかれてゐたわれわれの眼を娛しませてくれた。ヤルートは椰子の島である。左舷にどこまでもつづく細長く低平な島の上には、太陽の光を浴びて椰子の木がまるで綠の堤防のようにぎつしりと立ち竝んでゐた。そしてその木の間越しに、すぐ向ふの太平洋の水面が、時々銀色にちらと光つた。

船には、手つだひの島民が二人のりこんでゐたが、彼らは船が走りだすと間もなく、船尾から、長い釣糸を流し始めた。船はかなりの速さで走つてゐるので釣糸は殆んど沈まずに、水面をかすめてゐる。興味をもつて眺めてゐる中に、一尺五寸ぐらゐの魚がまんまと引つかかつた。この魚はヒラアジと呼ばれるものであつて、これを食ふものは島民だけで、邦人はこれを敬遠して食膳に上せない。一般に内南洋には、殊にサイパンとヤルートには、毒魚が多いといはれてゐる。中には同一種でありながら、産する島によつて毒があつたりなかつたりするといふ奇妙な言ひ傳へが在住邦人間に主張されてゐて、その原因はそれらの魚の餌になるといふ海藻の種類の差による毒の有無に歸せられてゐた。しかしこれは最近發表された研究によれば誤りで、兩者は別種であることが判明してゐる。このような誤つたいひつたへのせいもあつて、ヤルートのヒラアジは日本人から敬遠されてゐるのであるが、島民には無害で日本人には有毒などといふ奇妙なことがあるだらうか。これは毒の有無よりもむしろ、日本人の一つの悪い傾向たる、現地の食物になかなか馴染まないといふ事實の現はれと解してもよさそうである。魚に限らず、南洋には南洋でその土地の新鮮な食物が手に入るのに、相もかはらず内地から取りよせた不味い罐詰を食つてゐるのが現狀である。

ヤルート島が南西の方向に蜒蜿と連なつたその南端で、くるりと北西に方向を轉じる屈曲點に、目指すジャルーチの村があつた。ジャボール灣から約二時間である。船は目的地に近づくと速力を落して淺い珊瑚礁原の複雜な迷路を縫つて、たくみに岸に接近して行つた。やがてそれもできなくなつて、われわれは船の後に曳航して來たボートに乘りこんで進み、それから最後には、海の中を歩いてやつと上陸を完了した。船は再びジャボールへ引つかへして行つた。

上陸してみると果して、目につく木は全部椰子ばかりであるといつてもよい。コプラの産出額をみても、マーシャルが内南洋中最も多い。

内南洋の他の島々では、未だスペインが少數の官吏による壓政と强制的なカトリック布教の時を過してゐる間に、資源開發を植民地經營の最大の眼目としてゐた新興ドイツが、ニューギニアから東部ミクロネシアに勢を伸ばし出した最初の土地がこのマーシャル群島である。一八八八年には有名なヤルート會社が設立され、自後同社はこの群島のコプラ採取に最も力を注ぎ、大に椰子の植栽を奬勵したのでその結果が今日のこの産額を生み出してゐるのである。そしてこのコプラをとつてしまつた後の莫大な數量にのぼる殼を今までは棄てて顧みなかつたのであるが、最近になつて、邦人がこの廢物の殼から纖維をとることに着眼するようになつた。ジャルーチ村には、南洋製纖會社といふのが、この仕事をはじめてゐると聞いてゐたが、上陸地點からすぐ近くの椰子林の中に、その小さい工場の建物が見えた。

われわれが着くと直ちに、工場の中から折目正しい純白のズボンをはいた、長身の青年紳士が現はれたが、それは支配人の吉川氏であつた。一わたりの挨拶の後、宿舍として村の教會を使用してはどうかと提言されたので、椰子林の中を數町あるいてその教會を見に行つたが、小さい古風な建物の内部には、いくつかの長い椅子があるだけで、床はコンクリートで固めてあり、どう考へてもこれでは餘り寢心地が良さそうに思へなかつたから、やはり砂濱で天幕をはる方を撰んだ。結局、上陸地點のすぐ傍らの砂濱に三張のテントを張つて、雨覆つきの大型の二張りは住居用、小型の一張りは、倉庫にあてた。床には工場から提供されたタコの葉であんだ筵をのべた(第二十七圖版1參照)。いつの間にか島民たちが集まつて來て、われわれを遠まきにとりまき、その一擧一動を觀察してゐたが、やがて燃料あつめや、その他のいろいろな手傳ひをしてくれるようになつた。もはやお互の間に友好關係が成立するに至つたのであらう。夜になると彼等の中には、石油ランプをもつて來たり、雞をもつて來たりする者まで出て來て、言葉は通じぬけれども、それが彼等の歡迎の意を現はした行爲であることだけは間違ひなく理解できたのである。

夜は、全員大テントに集合して、吉川氏を圍んで、數時間話をした。この北海道生れの青年事業家は、兄さんの社長と共に、五年前ここに來て、數人の邦人從業員の協力の下に孤島生活をつづけ、今ではこの一村全部が工場で働いてゐる關係上、事實上の村長の位置にある人であつた。植民地によく見られる山氣たつぷりの群小事業家と異なつて、氏の堅實な進取主義は、われわれに大きい感銘を與へた。

翌朝、悲しいことには明け方から猛烈な雨であつた。雨は終日ふつたり止んだりで、遠出することができず、採集旅行を試みたり、島民の生活調査に行く計畫は、すべてお流れになつてしまつた。われわれは殆んど一日テントに暮し、晴間を見つけて海岸を歩くのがせいぜいであつた。海岸は、干潮の時にはおゐ分廣い面積にわたつて、珊瑚礁が露出する。しかし珊瑚礁といふものは、必ずしも内地や往路の船の中で頭に描いてゐたほど絢爛たるものではなかつた。そのような絢爛たる珊瑚礁を實際に見ることが出來たのは、ポナペにおいてわれわれの南洋生活も漸く終に近づいてからであつた。少なくともヤルートのそれは、灰色のがら石の、平らな濱にすぎなかつた。生物相は極めて貧弱で、眼につくものは紫色のなまこばかり、しかしそれだけは驚くべき個體數を示してゐた。貝がらすら眼につくほども落ちてゐないのにはすつかり失望してしまつた。そしてそれは礁湖の中ばかりでなく、外海の岸でも殆んど變りはなかつた。

われわれの南洋生活のうちでも最も深い印象の一つを與へたものは、この夜開かれた島民たちとの交歡會である。夕方には都合よく雨も上つて、美しい月が皓々と照りだした。やがて、工場のサイレンが勢よく鳴りひびいた。島民の非常呼集である。島民たちが歌と踊りで、われわれを歡迎したがつてゐるといふことであつたが、われわれの知らぬ間に、工場の方で着々と準備が進められてゐたのだ。

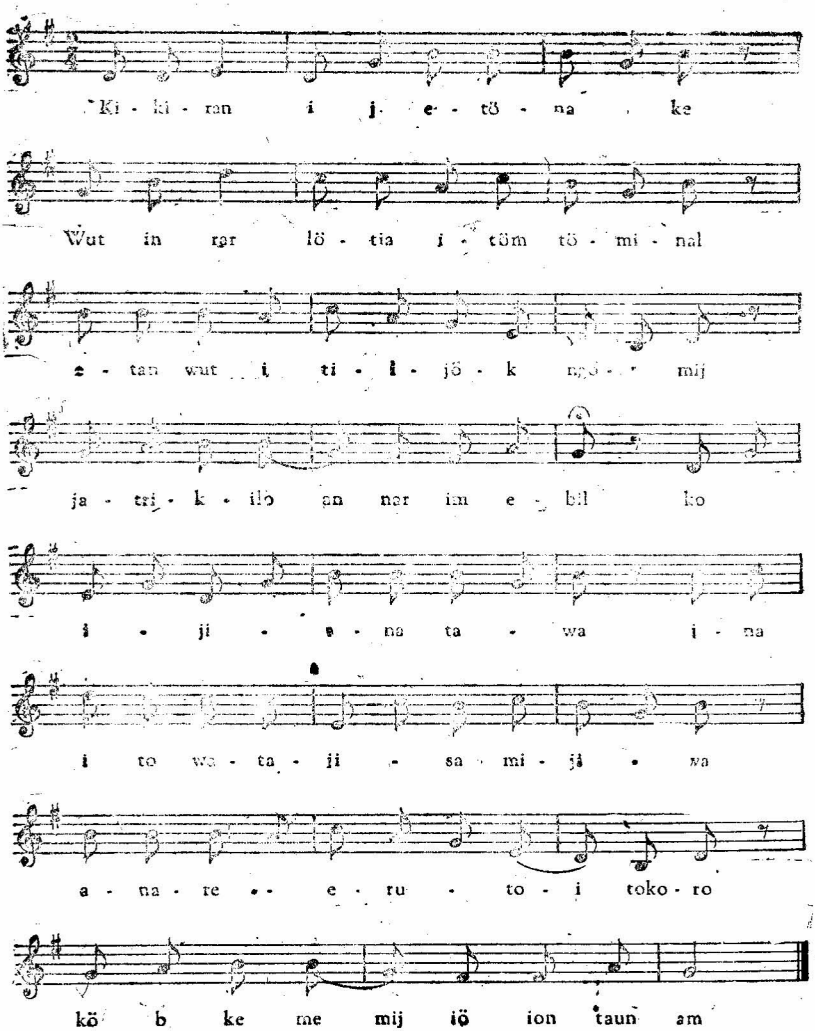
二度目のサイレンが鳴ると、あちらの椰子の蔭から、こちらの海邊から、三々伍々島民たちが姿を現はして來て、瞬く間に

その數は老若男女とりまぜ百人近くになつた。會場はテントのすぐ傍らの椰子林の中の一寸した廣場である。われわれはしつらへられた客席につき、島民たちはその廣場の片側に坐つた。前の方の中央席には、盛裝ともいふべき眞赤なドレスが華やかにひしめき合つてゐた。その中にいいお婆さんまでが眞赤な着物を着てゐたのは一寸意外だつた。男たちも今日は長いズボンに、派手なシャツで、彼女等をとりまく位置に、或ひは坐り、或ひは立つてゐた。これが彼等の密集合唱隊形であつた。

工場の人の號令で、島民たちは一齊に禮をした。島民語による一場の訓示の後いよいよ期待した島民たちの唄がはじまつた。それは壯麗な混聲四部合唱であつた。後方にテノールの一團がゐて、椰子の木にもたれて腕組みをしたり、しやがんだりしながら、自らの歌に醉つてゐるように恍惚として歌つてゐたが、それが全體のリズムを指揮してゐるかたちであつた。その前にはバスのリーダーが椰子の根元に腰を下して膝の上には赤ん坊をのせ、體をかすかにゆりながら、眼を閉ぢて單調な低音部を響かせてゐた。この男はすばらしい歌手で、高音部が休止してゐる間、ゆつくり低くつづくその量のある聲は、著しく效果的であつた。前方では娘たちの特殊の發聲法による甘美な旋律が渦まいてゐる。

歌はやや讃美歌風であるが、一節がずゐ分長かつた。長い歌を些かの亂れもなしに歌ひ終つた時、われわれは喜んでこれに讃歎の拍手を送つた。島民たちが歌好きで且つ上手だといふことはかねてより耳にしてゐたが、これほどとは思はなかつた。內地でもこれだけの人員を擁し、これだけ歌ひこなせる合唱團はそうざらにはみつからぬかもしれない。われわれもこれに應酬せねばならぬこととなつたので、自信はなかつたけれども「荒城の月」の二部合唱をやつた。すると島民たちはどう思つたのか萬雷の拍手をもつてこれに應へてくれた。こうなると氣分は急激に和らかくなつて行つて、次から次へ歌が交換された。そのうちにある島民の歌の歌詞が途中で突然日本語に變つたように思へた。おや？　と耳をすますとやはり日本語で

「コイシイアナタハ、キナイトワタシサビシイワ、アナレルトイトコロ……」といふ。


Ki - ki - ran i j. e - tö - na ke
Wut in rar lö - tia i - töm tö - mi - nal
ä - tan wut i ti - i - jö - k mij
ja - tij - k - ilo an nar im e - bil ko
i - ji - a - na ta - wa i - na
i to wa - ta - ji - sa mi - jä - wa
a - na - re - e - ru - to - i toko - ro
kö b ke me mij iö ion taun am

これにはみんなして大喝采を送つた。但しアナレル云々は「離れる遠い所」の意である。彼等はhの發音を持つてゐない。

遂に踊りが飛びだした。青年たちが二列にならんで、歌と、木箱で代用した太鼓に合はせて、腰をふりながら、輕いステップを踏んで、ぐるぐると動き始めた。會場は赫々とたかれた大篝火と、椰子の葉の間から差し込んで來た月光とで、舞臺照明は滿點であつた。われわれの寫眞係もフラッシュをもつて大活躍であつた。彼等はもうすつかり調子づいてしまつて、とうとう「ジャボア」といふ古式の踊りを踊ることを申し出た。この踊りは元來は酋長の許可なくしては行ひ得なかつたもので、今でも餘程の場合でないと踊らないといふ格式のあるものであつた。こういふ勿體づけにも拘らず、踊りそのものは、テンポのゆるい單調なあまり面白くないものであつた。歌も混聲合唱などではなく、ごく單純で、單一の旋律から成る粗野なものであつた。しかしその旋律の中にこそ、原始民族の精神はその健康さを見出してゐたであらう。われわれは、彼らがこの歌と踊りから次第に離れて、ヨーロッパ風の歌や、ソーシアルダンスで、つとめて近代人を裝ふようになつて了つた變遷の眞の原因といふものが、一體何處にあるのかを考へざるを得なかつた。

翌日工場へ行つてみると、島民たちは昨夜のことなどすつかり忘れたかのやうに、孜々として働いてゐた。彼等は今日はもう仕事に餘念のない眞面目な職工であり、女工であつた。われわれだつて勿論、嚴肅な表情を浮べて工場の中を視察する日本人の旅行者であつたらう。しかし約束通りに迎へのランチが來て、われわれが愈ゞボートに乘り込む前になつたら、島民たちは仕事を一時中止して見送りに出て來た。娘たちは再び昨夜のように、嬉々として寫眞をとつてもらつたり、歌つたりした。ボートにのりこむと、娘たちは海岸にならんで手を振つた。ランチが動き出したとき彼女らは歌ひ出した。昨夜のあの「戀しいあなたは、居ないと私淋しいわ。」といふ別離の歌を。そして手に椰子の葉を打振りながら波打際まで走り出て、それを海中に投げすてた。それは自分の持物まで投げ捨てて悲しむといふ島民の別離の悲哀を現はしたものであつた。次第に遠ざかつて

彼女らが砂濱の赤い點になつて了つても波の音に混じつて、まだ歌聲が聞えてくるように思はれた。

七

パラオ丸は、八月九日再びポナペに着いた。そして、翌日九日の午後には、内地に向けて出帆した。數年ぶりの休暇で内地にかへる官吏や會社員、取引商談に行く商人、應召の軍人、望鄉病の青年、笠置丸缺航の報に慌てて豫定を早めて歸途につく視察者、内地へ嫁入りする娘、情婦の出來た夫に愛想をつかして去る女、轉勤の巡査、そのような樣々な人々の群にまじつて、われわれ隊員四名も去つて行つた。そして、波止場の黑山のような見送り人の中には、新しく孤島の生活に參加するわれわれ六名が殘つてゐた。パラオ丸の出帆とともに。われわれの旅も第二段階に入つた。

船の出帆後、南貿波止場から、ごたごたした倉庫の間を拔けて、海岸通りに出ると、われわれは別に語る事もなく、町の中をゆつくりと歩いて行つた。コロニア全市民の運命に重大な影響をもつ船の入港と出帆とは、多かれ少なかれ市民の關心を奪ひ、この二日間といふものは町は異常に昂奮してゐた。役所も、各會社も何となくざわついてゐたし、商店街でも、この二ケ月の生活を支へる日用品や食料の入荷、それに内地向けの荷物の發送などで、落ちつく間もなかつたのだが、それももう終つてしまつた。

町は出船の昂奮から急激に醒めつつあつた。去つた人達はもう歸つて來ない。物資ももうこない。制限された電報と、二週間に一度の、それも正確を期し難い航空便をのぞいては、外界との通信も絶たれてしまつた。ポナペ二萬人の人間はまたもやここ二ケ月は外界と遮斷されてしまつたのだ。再び刺戟の乏しい孤島の生活が始まるのだ。そしてその二ケ月の籠城生活の中

へわれわれ六人が、新たに加はらねばならなくなつたのだ。

だが、すでにわれわれのコロニア市民としての生活は開始されてゐたともいへる。二回目の上陸といふので、海岸通りの教會の桓根のまんまるいサカヅキノキの葉も、町の至る所をかざるクロトンの多彩絢爛さも、もうわれわれの注意をひかなくなつてゐた。山の手の小高い所に、數本のカポックの木が一見樅に似た特有の枝ぶりを擴げてゐるのが、最初に上陸した日には「南洋にも針葉樹があるか」と、われわれ一同を驚かしたものだつたが、そのカポックの巨木も、街を歩いてゐるほどにあちこちに亭々とそびえてゐるのを知るに及んで、今では最も親しい植物の一つになつてゐた(第二三圖版參照)。町にすむ人々についてもそうであつた。南貿の賣店だの、すし屋だの、醫院、旅館、煙草屋、そう云つたものが、既にわれわれの記憶の中に着實な位置を占めつつあつた。かくてわれわれの周圍のすべてのものが、われわれと急速に新しい、社會的、心理的な連繫をつくりつつあつた。生活物資の大部分を内地に依存してゐるこの島の日本人にとつては、船の出帆は、確かにあと數十日間の孤立を宣告するものではあつたが、同時に船は過去數十日の乏しい生活の後に、豐富とはいへぬまでも新しく充分な物資を殘して行つてくれたのである。乾物屋の店先には、新しく開封された木箱の板片が散亂し、煙草屋では包裝を解かれたばかりの「櫻」や「光」等が、いつみても「興亞」だの「メープル」だのといふあまりうまくもない煙草ばかり並んでゐる硝子容器に一種の華やかさをそへてゐた。罐詰も來た。少なくもこゝ當分は少しは變つた食物を攝ることもできるであらう。

海岸通りの南の端の街角を曲ると、大王椰子の並木が、ギリシャ建築の列柱の樣に美しい中ぶくれの曲線をえがく幹を連ねて、廣い街路の兩側に並んでゐる。もうこのあたりは、町も郊外に近く、店屋もなくなつて、深い生垣に包まれた人通りの少ない住宅街であつた。淋しいがらんとした廣い通りを六人きりになつたわれわれは、靜かに坂を上り、グラウンドを横切つて、新しく定まつた宿舍の方へとあるいて行つた。

右の方には支廳舍の高い建物が、丘の上にそびえ立つて、折からせまつて來た早い夕やみの中に、美しく電燈を明滅させてゐた。

八

熱帶のはげしい日射しに、すべてのものがぎらぎらと光つてゐた。道路も家の屋根も、椰子の幹さへもが、强烈な光線を浴びて、强い反射に白つぽく輝き、眼の弱いものは色眼鏡なしには外出をしぶるほどであつた。ただ町の中にも所々にある巨きい濶葉樹の樹立の下だけは、密生した葉むらが完全に光線を遮ぎつてゐて、過剩光線が氾濫する中にぽつんと黑い島をつくつてゐた。そこではオアシスに來たようにほつとして瞼を開くこともできるし、暑さも涼しく、大てい四六時中吹いてゐるそよ風も此處で始めてその效力を發揮する。

熱研は丁度そのような木立の中にあつた。マンゴーとか、ボナペペニシタンとか、タイヘイヨウクルミなどの熱帶の濶葉樹の他に、珍らしく針葉樹の南洋杉(アローカリア)(第二十六圖版2參照)もまじへた森の中に小綺麗な平屋が涼しげに建てられてゐて、その一段と高い漆喰の床の上には、龍舌蘭の鉢植が並べられてゐた。建物の前から林の中を門の方へ出てくると、例の如くぎらぎらと光るバラス道が、北の方へ一直線につづいてゐる。大王椰子と南洋各地から集められた色とりどりの花の咲き匂つてゐるブゥソウゲが道の兩側を飾る中を拔けて門柱を出ると、春木(はるき)村から來る大道路が熱研の生垣に浴つて走つてゐたのが此處で直角に折れて、そのまま門の正面を眞すぐにコロニアの街の方へ下つてゆく。廣いけれども幾條ものトラックの轍の入つたその赤土の凸凹道を一丁ほど行くと、道の左側の一寸した土地の高みに、まだ建つて間もないらしい小ざつぱりした洋風の住宅が見

える。敷地のまはりには、垣根といふほどのものもなく、赤土の道路からすぐに柔かい芝生のゆるい斜面がつづき、石造の門柱の間からその芝生の中に踏み固められた小徑を入つてゆくと、クロトンや孔雀椰子（カリオタ）の樹立ちをぬけて、その家の玄關に達する。これが、コロニア市民の通稱によると、「分場長官舍」である。

壁は一見北方建築を思はすような厚いコンクリートで被はれてゐて、觀音開きの鎧戸のはまつた深い窓がうがたれ、その下には直徑五〇糎もある石貨がもたれかかつてゐる。コンクリートの厚い壁は、素人目にはいかにも矛盾してゐるようで、すき間を多くしてベニヤ板ででも家をたてたら如何にも涼しからうと思へるのだが、また實際日本人の家には、この町でも時々そんなのが見受けられるのであるが、事實は決してそうではなくて、はげしい日射による暑氣をふせぐためにも、執拗な白蟻の攻撃を避けるためにも、厚いコンクリート壁が結局最も効果的なのである。後にわれわれが實見したように、島民中でも文化程度の高いサイパンのチャムロ族の住宅は、その方則通りに、珊瑚砂のコンクリートで、驚くべき厚い壁にぬりこめてあつた。建物の半分は、三方硝子張りの廣いベランダになつてゐて、すぐそばに植込まれた數本のパパイヤの大きい葉が、さらさらとその硝子の面を撫でてゐた。

床は、これも熱帶建築の常石通りに、幾本ものコンクリート柱によつて、地面から一米近くも、もち上げられてある。建物の右隣りには住宅とその高さを競ふほどの大きい水槽が、やはりこれもコンクリートで築かれてゐた。一搬に飲料水に乏しい內南洋諸島では、天水を貯へる水槽の果す役割は極めて大きく、ヤルート等などでも島民の最大の念願の一つは自分で水槽を持ちたいといふことであると聞いた。カロリン群島最大のこの町でも上水道の設備はなく、また井戸もなく、すべての用水は各戸の水槽から供給されてゐた。母屋の屋根にふり注ぐ豐富な天水が、はりめぐらされた樋によつて、一本の管に集められ、水槽の上部から注ぎこまれるようになつてをり、下部からはやはり鐵管が臺所や風呂場へと連絡してゐる。

屋内は和洋折衷で、壁はやはり内地風の襖ではなく、外と同様の厚塗りのコンクリート壁であつた。その卵色の壁にかかつた額の後からときどきやもりが不氣味な灰色の姿を現はしてキチキチ鳴いた。疊は殊に邊境に住む日本人にとつては懐しく快いものであらうが、此の島では、材料と技術者を缺くせいか、或ひはむしろ多濕といふ風土的條件に支配されてか、殆んど使用されてゐない。この家でも、かたい板の床の上に、一見疊を思はすような上敷が張られてゐるにすぎなかつた。

要するにこの官舍は、この土地の種々の條件を配慮してつくられた上流日本人の住宅の一つの典型なのである。そしてその家の主、星野分場長の熱研に通ふ姿が、パラオ丸の出帆とともに、例の赤土の道から消えて以來、入れ替つてこの家に生活を始めてゐるのが卽ちわれわれ六人であつた。それが分場長の御好意によるものであることはいふまでもなからう。

八月一一日にここに移つて以來、夜は、ベランダの籐椅子に腰かけて、調査計畫の細目の打合せや、さまざまな論戰などで更けていつたが、晝は一二の留守番をのこして、大てい用事のため、諸種の交渉、買出し、情報集め、郊外の豫備的調査などのために、外出してゐることが多かつた。

官舍の前の道路を、熱研の門とは反對の方向に、海の方へ數丁下つて右に折れると、右手の高臺の上に大きい支廳の建物とそれに並んで郵便局とがあつた。そこではまがらずに、尙も眞すぐに下つてゆくと、いはゆる並木通りの繁華街である。そしてそこから斜の右に横丁を入つてゆくと、今度は、新しいここの町には珍らしく古めかしい赤煉瓦の、所々に銃眼の設けられた厚い城壁が連なつてゐるのに出會す。その壁には、一面に雜草が生ひしげつてゐたが、これがこのコロニアにおける、血なまぐさいスペイン統治時代の殆んど唯一の遺跡なのである。

ミクロネシアの島々に對しては、マリアナ群島以外は永らく捨てて顧みられなかつたスペインも、マーシャル方面を根據とするドイツの新興勢力に對抗して、一八八七年には、ヤップについで此所ポナペに政廳を置いて統治を始めた。その後、結局

米西戰爭で太平洋よりスペインは後退し、代つてドイツがミクロネシアを經營するに至つてからも、やはりその政廳はヤップとポナペにあり、コロニアはその所在地として、在留歐人も多く此の地に集まつてゐたのであつた。日本委任統治領となつてからは、內南洋の政治の中心はパラオに移つたけれども、昔の傳統をふんでコロニアには支廳が設けられ、東カロリン群島の中心都市としてのコロニアの地位には依然として變りがないのである。そしてこういつた歷史的背景のもとにこの町を眺めると前述の城壁以外にも、たとへば支廳の建物自身がドイツ時代の知事の官舍であつたり、熱研の敷地がドイツ時代に計畫された植物園の一部分であつたりしたことが、日を追うてわれわれにまで明らかとなつた。ポーランド生れの薄命の博物學者クバリーがその放浪の生涯を自ら終つたのもコロニアの郊外においてである。その死後、彼の財產を受けついで町の東郊にある椰子林を經營してゐたドイツ系ベルギー人のエッチャイトの息子たちが、さつきの城壁から海岸通りに出るジグザッグの坂道に面して、ささやかな洋品店を經營してゐるのも、生ける遺跡としてわれわれの注目をひいた。

コロニアははじめは確かにこのようにして白人の影響下に成立した町であるには違ひないが、領有以來二〇年を經過した現在ではそれは完全に、日本人の町になつてしまつてゐる。そしてこの日本人化に成功した原因の一つは、もともと居留外人の數が幾何もなかつたことによるであらう。例へばドイツ時代には、ヤルート會社の經營に依るマーシャル群島は別として、全南洋群島統治に、僅か三〇名足らずの官吏をもつてしてゐたのである。現在ではポナペだけでもそれに數倍する官吏が勤務してゐる。とにかく國際聯盟に對する義務の意味もあつたであらうが、小學校、公學校、熱研、郵便局、裁判所等が、着々と整備されるようになつたのは日本人の委任統治になつてからのことである。

このことは日本にとつて內南洋が官吏だけの世界でなくて、その行政の內容としての一般民間人の進出も頗る著しいものがあることを意味してゐる。

しかも今なほ未完成都市として膨脹の一路を辿りつつある。從つて官廳のみでなくて地方自治團體の活動も活潑らしく、丁度われわれの滯在中、町角に町會議員の當選御禮のビラがはり出されてあるのを見た。

かくて內南洋全體の傾向として、こともドイツの投資植民地より日本の移住植民地へと轉換したのであるが、といつて決して投資がおろそかにされてゐるわけではない。試みにコロニアの海岸通りを歩いて見ると、そこに並ぶ建物は、食料雜貨店か土產物店に非ずんば會社の事務所であるといつてよい。南貿、南興などの大會社を始め、そのほか有名無名の小會社が、このポナペの島だけでも三〇からあるといふのである。

この現象は最近のものであるらしいが、こんなちつぽけな島に三〇餘の會社が押しあひへしあひしてゐて一體何の事業をするのであらうか。實はこの現象の中にも彼等のねらふのは恐らくポナペ島の乏しい資源ではなくて、次に當然來るべき外南洋の厖大な資源なのであらうことがうかがへるのである。ポナペにおける小規模の事業は、事業家自身にとつては單に一つの試金石であらうし、また外南洋への道が開かれた場合、發言權を確保するための一つの資格としての意味をもつものでもあらう。從つて、ポナペにおける彼等の事業それ自身が、必ずしも地方產業としての重要な意味をもつてゐるわけではない。今の所は細々ながらも、時期至るまで會社をもちこたへればよいのであるといつて、われわれの會つた事業家たちは、口を揃へて內南洋の經濟的無價値論をとなへたが、かかる資本主義的經濟觀念の是非については、なほ多くの問題が殘されてゐるであらう。

南洋群島のすべての島と同樣に、此所では、外界との接觸は唯無電のみをもつて行はれてゐる。ごく最近には、パラオにも放送局ができたが、われわれの滯島中はラヂオは東京の放送を捕へねばならず、一般家庭ではその普及も著しくなかつた。それだけに、ラヂオのニュースは一段と熱心に聞き入つてゐる。後に、われわれが再びコロニアに戻つて來て、何かニュースはなかつたかと聞いた時に、ある人が全く親切に、そして眞面目な顏付で淀みなく答へてくれたものだ。

「昨日、平沼内相が一暴漢に狙撃されました。しかしその後經過良好で、今朝は、重湯を茶わんに一杯と、果物汁を五〇瓦を攝られたさうです。晝には、牛乳を五勺と果物汁五〇瓦、夕方には……。」

支廳の正面の大通りの坂の中ほどに、ささやかな印刷所があつて、そこから本島唯一の新聞カロリン・タイムスが發行されてゐた。小型二頁の小新聞ながら、日刊で、これでもトラックあたりのがり版刷りの半紙新聞よりははるかに立派で、市民にその日のニュースを提供する最大の源であつた。だが、島の上層部やインテリ階級では、この新聞ではその文化的欲求は滿し難いらしく、やはり一船毎に入荷する内地の新聞を、數十日分山の如くつみ上げて讀みふけるのである。

ニュース機關に限らず、一般にこの島では文化的刺戟が著しく缺乏してゐた。圖書館や博物館があるではなし、本は全部内地からとりよせねばならず、そのためには都合よくいつても入手は一ケ月後になる。だから島の生活を一年もつゞけたら若いインテリなどは、用件で内地へかへる場合でも、自分がすつかり時勢からおくれてしまつたような氣がして、變なことをいつて内地の人に笑はれはしまいかといつた風の强迫觀念にとらはれるといふ。娯樂機關の缺除も著しく、低級な映画館と寄席があるにすぎない。スポーツ施設もこれといふものはなく、在住邦人間のスポーツ・クラブの存在についても、われわれは寡聞にして聞くことを得なかつた。支廳の裏にかなりのグラウンドがあつたが、われわれの滯在中使用されてゐるのを見たことがない。南洋生活者のおほふべからざる能率低下は、誰の意見を叩いても、殆んどすべての人がその氣候條件に依る生理的原因に歸してゐるが、われわれの見た所からいへば、かゝる文化的刺戟の缺乏こそは、その最大の原因の一つではないかと考へられる。その上、植民地のつねとして、このコロニア市民の中にも多數の家庭を持たぬ人々があつて、毎日味氣ない外食生活を送つてゐる、そうした人達がこういふ狀態であれば、これまた植民地のつねとして、酒と女とに走つてゐないとは斷言でき兼ねるのではなからうか。その方面の業者が段盛を極めてゐるといふ話をきくと、日本人の健全な海外發展といふ立場からはや

はりうつちやつて置けぬものがあるように思はれたのである。

ポナペにゐながらポナペに住みついてゐないといふ感じは、例へば在住邦人の食料を見ればよくわかる。島では、島民食料と日本食料といふものははつきり區別されてゐて、日本人たちは殆んど島産の食料を攝らうとはしない。南貿の賣店や、海岸通りの食料品店は、何時行つても乾物と罐詰を買ふ人で賑はつてゐたし、野菜類すら、馬鈴薯、玉葱などの移入品ですましてゐる。春木村からときどき運ばれてくるものも、それに何ほどの追加をも附加へない。島の國民學校にかよふ小供たちの發育がどうもよくない、といふ事實をも、邦人たちは氣候のせいにしてゐるけれども、內地で食べつけてゐた食品のうちで南洋で手に入るものだけを食つて、どうしても缺けざるを得ない種類の食物を、島民食の中から補充しようともしないのだから、偏食になつて榮養障害をおこすのは當然である。例へばわれわれが後にマタラニームに行つたとき、南興の倶樂部の食膳には、コロニア市民に見せてやりたいような島産の一種の野菜があつた。これはナンヨウホウレンサウとよばれる種類で、十分ほうれんさうの代用となり得るのであるが、ただ內地で食はぬ植物であるために、一般に問題にされてゐないのである。日本人の食糧はいまになつて慌てて自給自足策をたててはゐるものの、まだまだかかる內地依存の狀態にあり、從つて、その消費もまゐ分制限されてゐた。われわれも、コロニアの生活に入ると同時に、支廳の殖產課へ行つて、米、味噌、醬油、砂糖、鹽、ビール等の配給券をもらつて、それをもつて指定賣店で配給をうけたものである。配給になつてゐるものの入手は確實であつたが、その他馬鈴薯などの野菜類、及び煙草は、入荷と同時に、店頭に姿を現はす前に箱入りのまま特約の家庭の臺所へ流れて行く特殊の配給機構によつてゐるので、新參のわれわれが店へ行くころには、一人で抱へられぬ程巨大で不味い冬瓜と、臭い朝鮮煙草がのこつてゐるにすぎなかつた。

一般に食糧問題に限らず、ここの日本人はこの土地及び島民とはまるで無關係の生活を營んでゐる。多くの市民の行動區域

は、せまい町の中だけに限られてゐて、南洋にすみながら南洋についての正確な知識を殆んど何一つ持合はせてゐなかつた。島民とはまるで沒交渉である、といつても、島民が町の中に姿を現はさぬわけではなかつた。むしろコロニアの街をあるく人の數は、邦人よりも島民の方が多いくらゐで、町の中にも彼等の住居は多數あつた。それぱかりでなく、全島各地から彼等は屢〻コロニアへ遊びにやつてくる。それにも拘らず、支廳の役人や宗教家などは別として、一般市民の生活の心理においては島民は全く無視されてゐるといつてよい。あたかも大人の生活にはまだ參加する資格のない子供として、島民はむしろ甘やかし遊ばしてある、といつた方が適切である。しかし日本人が島民食を頑として受けつけずに、內地風の食料を固守してゐる間に、島民の方はどんどん日本化して、米を食ひ、味噌を使ふようになつてゐたが、最近の事態に鑑み、島民は島民食にかへらせられ、米その他の配給は停止されてしまつた。これは確かに差別待遇であらうがお互に已むを得ないところである。その他には町の喫茶店の机や撞球場の臺に、邦人用と島民用との區別をしてゐる店が存在する程度で、島民は殆んど何らの差別待遇をもうけてゐないのである。かくの如く島民に對する邦人の感情は、植民地にみられ勝ちの輕蔑と嫌惡ではなくして、むしろ寛容と放任であつた。そして兩者の關係は常に和やかであつた。これは一つにはこの土地の領有當初よりの、傳統的な氣風にもよるのであるが、一方では又こうした寛容さに不平の聲がないでもない。その聲は邦人の殆んどすべての階級に屬する人々の間で聞かれる對島民政策の手ぬるさに對する批難である。しかしわれわれの見るところでは、寛容さ故に島民が著しくつけ上つたといふような惡影響よりも、むしろそれによつて惹き起された兩者間の友情と信頼との方をとるものである。

一般邦人の側からは、特に島民指導のために力を注いでゐるわけではないが、島民に對する邦人の影響は漸次滲透しつつあつた。邦人の家庭に働くボーイなどが、逸早く邦人を見ならふのは當然であるが、その他の島民にしても日本人に對して何となく憧憬を感じてゐることは確かである。領有の初期には、やはり日本人の寛容さに對してつけ上るといふ風がないでもなか

つたらしいが、今では、殊に最近は巨大な日本の國力が漸く彼等の頭にも理解されるに至つて、漸次邦人に對する尊敬と、接近の欲望が高まりつつあると見てよい。ときには、赤い塗下駄に日傘をさして、すれちがひざまにその表情さへも日本人的なはにかみを示して、會釋して行く島民の娘にも出會ふであらうことを附記しておく。

九

八月一五日、朝から雨が降つてゐる、熱研構内にある氣象觀測所の高い建物の背後に展開してゐる筑波川流域の廣大な平地林も、すつかり深い霧に閉されて何にも見えぬ。近景に大きく枝を擴げたセタックの獨立樹の饅頭型の樹形だけが、その霧の中からぼんやりと浮き上つてゐた。今日は愈〻出發の日である。

われわれがほんとうに山に入るのは、更に數日の後であつたが、われわれはその前に、マタラニーム村へ移動する豫定であつた。そこには興發の甘蔗畠と工場があり、そこから島の最高峰ナナラウトに通ずる道が始まつてゐるのだから。マタラニームに行くについては、われわれは二隊に分れることにした。一隊は汽艇でリーフ沿ひにまはり、海からの廣い視界を利用しての植生圖を作成する。他の二隊は一周道路によつて陸行する。何れも一日行程である。午前八時すぎ丁度雨も止んだ頃船行班は波止場から出て行つた。

山は、次第に晴れつつあつた。霧がまるい裾野を徐々に這ひのぼつて行き、鬱の椰子林の特徴のある梢の葉むらが、次から次へと重なり現はれた。それに續いてナナラウトの雄大な斜面が乳色のヴェールの中から次第に姿を現はし、古い噴火口壁の殘骸だといはれる三角山も、その整つた形をすつかり見せて來た。海岸の町では、もう時々陽が射してゐる。

われわれはそれぞれ小さいルックを肩にして宿舍を出發した。コロニアの町を出外れた頃は、もう陽光燦々としてしきりに水分を蒸發させてゐたけれども、さらでだに悪い道は、一晩中降つた雨の後のこととて、泥は氾濫し、殆んど歩行にたへず、かへつて椰子林の中を歩く方が捗るほどであつた。道は、コロニアから東の方へ、三角山の裾野をはるかにまはつて、曲折しながら峠をこえ、所々に島民の部落を點綴する椰子林を貫いて、ウ村を經てマタラニームへと通じてゐる。

コロニアの平野を貫通する筑波川の、マングローヴにかこまれた廣い河口の入江をわたると、もはや全く島民の世界に入る。行けども行けどもつづく椰子林の中では、すでに都會にひしめき合ふ俗つぽい日本人のにほひを少しも止めてゐない。われわれは日本人の世界を離れて、かへつて奇妙にも久方ぶりに氣安い開放感を覺えた。始めは自動車を通ずるほど大きかつた道も、いつの間にか美しく草の繁つた細い田舍道に變つてゐる。島民がときどきパンの實を天びん棒にくくりつけて運んでゐるのに行きあつたが、それらの島民たちも、町を離れるにつれて次第に純朴になつて行くように見えた。筑波川をわたるあたりでは、ギターをかかへたハイカラ島民が、「今日は」と挨拶して行つたが、やがて田舍に入るとその挨拶も島民風に、「カシレリヤ」と變る。「カシレリ」といふのはポナペことばにおける殆んど唯一の挨拶で、「今日は」にもなれば「今晩は」にも、「お早うございます」にも、「さよなら」にもなる語である。そして同等以上の人に對しては「カシレリヤ」といふ。

島の東北につき出た半島を迂回するのをさけて、やや高い峠をこえると、その下にウの村が展けてゐた。臺地狀の山頂部に發源した水流が、溶岩臺地の端まで來ると、雄大な瀧になつて斷面をほとばしり落ち、綠の中に見えかくれするその白い糸の下に、島民家屋には珍らしい文化住宅の赤屋根がちらちら見えてゐた。とり分け大きい白塗りの建物は教會であらう。村を通る道路の眞際まで、波が打ちよせて來てゐた。海岸は隙間もなくつづくマングローヴの泥沼であつた。

ウ村の中心部落ナンウーは、淺い珊瑚礁原の發達した海岸にあり、そこでは一丁ばかりマングローヴの繁みが切れて小さい

突堤の設備もあつた。突堤のきはにならんでしやがんでゐた五六人の島民の子供たちがわれわれの姿をみるとはつと直立不動の姿勢をとり、一齊に元氣よく「コンニチワ」と言つてペコリと頭を下げる。その中の一人色白の島民ばなれのした可愛い女の子は、ついと列を離れると海岸のカヌーにのつて、一人ですいすいと漕いで行つた。島民の公學校よりないこの村で、島民と同じ教育をうけ、島民語を話し、彼等とあそんではゐても、この子は果して日本人の子供であつた。われわれは間もなく村の駐在所でその子の父親の警察官の接待をうけて、しばらく休憩した。内南洋のどの島でもそうであるように、この島の政治もやはりよかれ悪しかれ警察政治である。各村では、支廳から任命された島民の總村長、村長がゐるには居るのだが、事實上の諸權は各村の邦人駐在官の手中にある。その人が島民に一切の命令を與へ、同時に島民の一切の面倒を見てやる。その下に、島民の優秀なもののうちから拔擢任命された巡警がゐて、その人を補佐してゐる。かくて邦人の警官一家は、最高權威者として村に君臨してゐるのである。

われわれのためにも直ちに命令が發せられて、民巡警が出て行つたと思ふと間もなく、日本語のよくわかる若い公學校出の島民が案内としてやつて來たので、われわれはその男をつれて、マタラニームへの峠ごえのために駐在所を辭した。彼は島民には珍らしく、ちやんとした衣服を着け、地下足袋にゲートルといふいでたちであつた。彼の流暢な日本語は、われわれの執拗な質問に對して、明快に答へることができた。しかし、われわれを驚かしたのは、彼の日本化ぶりではなく、むしろそのすばらしい博物學者ぶりであつた。實際彼は、われわれが如何なる植物を指し示しても立所にその島名を答へ、その花や、果實の形態などについてくわしく説明し得るのであつた。だが、後に知つたことであるが、彼ばかりでなく、一般に島民は彼等の生活をとりまく動植物について、實に豐富な觀察と知識をもち、誰でもが山の木や草についてその名をいふことができたのである。試みに誰でも田舍にすんでゐる島民の男を一人つれて海岸をあるくならば、數時間にして彼はこの島に成育するマングロ

ーヴのすべての種類について適確な知識を與へてくれるであらう。實際、われわれはウ村のイプトクからマタラニームのレイタオへ峠をこえる時までに、三人の案内人を取りかへたのであるが、彼らは何れも同樣に正確な博物學者であつた。

所謂第三段面の椰子林の中に散在するイプトク部落で、われわれは最後の案内人を傭つた。彼は二十すぎの青年であつたが、もう日も暮れかけてゐるのに、平然として腰布一枚で大きい山刀をもつて先頭に立つた。峠とはいふものの、それは殆んど道の形をなしてゐなかつた。錯綜するカラオの根の間をかすかに切り開いてふみつけた程度で、島民の案内なしでは夕方には些か通り難いほどのものであつた。所謂カラオ・ゾーンを拔けるころ、とつぷりと日は暮れてしまつた。島民は默々としてバサリ、バサリと草を切り拂つて進む。やがて彼は、枯れた椰子の大葉を一枚とつてくるくると束に丸めると、上からしばつて炬火にした。峠の上は再び椰子の林である。

峠から行手を見ると、眼下に大市街が展開してゐた。レイタオである。數條の電燈の列が長くはしり、それに沿うてまるで市街電車でも走つてゐるかのような幻想をさへ與へるほど、その町は立派に見えた。暗夜の悪路に、われわれは既にかなり閉口してゐたのだが、これを見るとまた元氣づいて、峠を下つて行つた。しかし、峠の下りは更に道がわるかつた。甚だしい急斜面をジグザッグもなしに眞直ぐ下る出鱈目な道で、その上椰子のたいまつもその照らし得る範圍はごく せまく、われわれは一歩々々足さぐりでゆつくり下りてゆかねばならなかつた。案内がたいまつを一振りすると、そのあふりで一しきりぱつとはげしく燃え上り急にあたりが明るくなり、叢に落ちた彼の影がゆらゆらとゆれて、褐色の半裸體が眼前に大きく照らし出される。彼は案内の責任を感じてしきりにわれわれに氣をつかひ、石塊の多い道を時々聲をかけて注意を促しながら歩いてゐた。やがて火が消えてしまつたが、彼は何の躊躇もなく進んでゆき、躓くおそれのある石塊が現はれる度に山刀でカンカンと叩いて示した。所がそのうちに彼自身がひつくりかへつた。そして笑ひながら「忘れてゐましたよ」といふ。彼は、道にある石ころ

や切株は全部そらで知つてゐたのである。

町の灯は眼の下に見えてゐても、仲々近づいて來なかつた。やつと惡路をのり切つて廣々とひろがる甘蔗畠の中に出たのは相當おそくなつてからであつた。われわれはしかし間もなくレイタオにある興發の倶樂部に達して、先着の船行班に迎へられたのである。案内の島民は、とりあへず勞をねぎらふために與へたビスケットを子供に食べさしてやりたいからといつて紙にくるむと、さつさと又もとの峠の惡路をイプトクの方へひつかへして行つた。

十

陸行班が、一周道路をマタラニームへと急いでゐる間に、船行の三人は、リフの外側の荒い浪にもまれながら、ランチの窓から、岸のマングローヴ林、ココヤシ林、その上のトオン・セタック林と規則正しく排列する陸上森林について、望遠鏡でその觀察をほしいままにしてゐた。森林構造の詳細については、その中に實際足を踏みこまなくては到底十分なことはわからないけれども、大よその概觀を得るためには、岸近い海からの展望は非常に有效なものである。

ナヌエの島と、本島との間のせまい海峽をぬけて、タカイユ(takai＝石 eu＝一)のその名の暗示するようなすばらしい玄武岩の尖峰の下をまはると、全島でも珍らしく長いマングローヴ林中の水道(クヽ)に入る。外海(そとうみ)の水があくまで清澄なのに比して、マングローヴの中では水はどんより打ち沈んで、褐色の強い泥水である。スロー・スピードで水道を上つて行く船のエンヂンの振動をうけて、重々しげな水が、びりびりとこまかい波動をえがくと、その面に姿をうつしてゐる兩側のマングローヴの影もゆらゆらとゆれさわいだ。岸の最前線には、特徴のある弧狀の氣根を幾本も張り下してゐる、オホバヒルギとベニガクヒルギ

が、一寸のすき間もなくたち並び、その背後には背の高いオホバナヒルギの不恰好な枝ぶりが、ちよつとお化けのように見える。

オホバナヒルギには、巨大な着生羊齒がまつはりついて一しほ怪奇さを增してゐた。水道は、上るにつれて次第にせばまつて來た。後をふりかへると、いつの間に折れまがつたものか、既に海は視界から消えて、マングローヴのしげみですつかりふさがれてしまつてゐた。前方も、すぐ眼の前で水道が行きづまりにでもなるかのように、ここもぎつしりとマングローヴに蔽はれてゐる。だが、その樹の壁に接近して見ると、豫期せぬ所にぽつかりと通路が開いてゐて、船は、方向を變ずるとするとそのせまい水路へ吸ひこまれて行つた。マングローヴの根元をひたしてゐる泥色の水を見てゐると、その中からひよいと鰐でも顔を出しさうである。行けども〳〵同じような水路を、ただ漫々としてみなぎる褐色の水と、際限もなく廣がつてゐそうなマングローヴのしげみにかこまれて、もう何粁も上つたことであらう。しかしわれわれはこれから先もどこまでもこんな狀態がつづいてゐてほしいと願つた。何だかコンゴーか、アマゾンにでもきてゐるような錯覺に陷入る(第九圖版1參照)。

閉づるかと見えてはぱつと開く水路の屈曲を幾度かくりかへして、とうとう水道は終り、南興の船着き場につく。そこからトロッコ鐵路が、此所もやはり赤土の泥道の上を、工場の方へ通じてゐた。工場の横の事務所に立寄つて、われわれに提供された宿舍に案内される。そこには、西山、近藤、古里、泉井の諸氏がすでに先日からそれぞれの研究を始めてをられた。陸行班も、島民の案内を先頭に、午後九時頃元氣に到着した。山地部の研究を始める前に、翌日から數日の間、われわれはレイタオを中心に附近の調査をつづけた。到着の次の日は、荷物の整理のために出歩けなかつたが、その次の日からは山麓の原生林へ小旅行をしたり、一周道路を數粁コロニアの方へ戻つた所にあるマヂショウ、オーワ方面や、マタラニーム灣に大きな防波堤のように横たはるナヌエの島へ遠征したりした。ナヌエの島では、かつてのカナカの偉大な建設力を物語る、玄武岩の大六角

柱で構成された巨大な建造物、有名なナンマタールの遺跡を訪ねた。

コロニアですらその歴史は大して古いとはいへまいが、レイタオは、まさにこのほんの數年間に、忽然として出現した新興工業都市である、小さな島には珍らしく廣く平らなこの土地も、かつてはトオン、セタックの原始林に蔽はれて、ただ海岸附近にのみすむ小數の島民の世界であつた。そこへ昭和八年に至つて南興の手によつてはじめて開拓の斧が打ち入れられた。それから數年ならずして、この森林に蔽はれた臺地は次々に美しい穗波を打たす甘蔗畠に變じ、レイタオ川のほとりには、堂々たる工場が建てられ、鐵道が敷設され、社宅が出來て、今ではポナペ第二の町になつてしまつた。開拓前は濕地が多くて、材木人夫などは、往々腰まで泥中に沒して作業に赴いたといふことである。熱帶の開拓地の常として、惡疫に惱まされたのはいふまでもなく、この事情は島の反對側にある春木村でも同樣であるが、當時はワイル氏病にたふれるものが非常に多かつたといふ。ワイル氏病といふのは、熱帶に廣く分布してゐる病氣で、濕地に働く人々が屢〻これに襲はれ、發熱、體色青變し、遂には死亡者も出る。全くの未開地よりはむしろ、半ば開拓中の濕地に多く、すつかり開かれて排水され乾燥して來ると、また減少するといふが、それでもなほわれわれは、レイタオの南興の病舍に、ワイル氏病患者の勞働者たちが多數收容されてゐるのを見た。一般に、原住民よりは外來者が罹病しやすいと言はれてをり、われわれも山の濕地歩きは絶對にさけ難い關係上、船中でもその豫防注射をして來たのである。島では、在住邦人には全部一ケ月一回の注射が實施されてゐる。

さて日本人とカナカ族といふほど文化程度の異つた二民族の場合、屢〻見られることではあらうが、ここでもコロニアの町と同樣に邦人のレイタオ建設過程において、また現在の生産、需要において、島民は殆んど無視されてゐると云つてよい。少なくも、島民が日本人の活動に何ら重要な役割を演じてゐないことは確かである。ここの農場の勞働力にしても、わざわざ遠來の沖繩縣出身者と朝鮮人とが、この役割を務め、島民の常備人夫といふものは極めて少數であつた。町の中を何の屈託もな

げにのろのろと歩きまはつてゐる島民たちは、その殆んどが支廳統計表中の農耕者の項目にふくまれるもので、即ち自家の椰子林によるコプラ生産をもつて主要な仕事としてゐるのであつた。町から一歩出外れて少しく森の中に入ると、依然として島民部落がパンの木蔭に昔ながらの椰子葺の姿を隠顯させてゐる。そして彼等自身の生活も、直接には新しい移住者たる邦人とは一應縁の薄いものと見做してよかりそうである。とはいへ、やはり邦人に接觸する機會の多い彼等がその生活樣式、言語、習慣に、より田舍のオネあたりに比してはるかに多くの影響をうけてゐることはもちろんである。その意味において、われわれのポナペにおける生態觀察の四地點の一つとして、レイタオが加へられてあつたのは當然でもあり、また成功であつた。四地點といふのは、即ち邦人の都市コロニア、邦人の農村春木村、最も純粹な島民部落オネ、及び邦人、島民の混住するこのレイタオである。

何れにせよレイタオに來てから、コロニアでは經驗出來なかつた島民との接觸が、著しく增したのは事實である。例へばわれわれの宿舍にメリーといふ少女が女中に來てゐたが、その父親のリアンテルといふのが、もと村巡警も勤めたこともある島民中でのインテリであつて、早くから日本人に接して、今までは三度の食事に米をくふのはもちろん、味噌汁がないとどうも落ち着かぬといつた風で、且つまたそのような日本化を自ら誇りにしてゐるようでもあつた。そして今では、土地をもたぬ一部の島民のために、パンの實などを賣り、また會社の邦人獨身社員のために洗濯屋を開業してゐるといふように、島民としてはかなり變つた頭の進んだ男であつたが、われわれは間もなくこの男と懇意になり、それを手始めに徐々に島民の生活の實狀に立入り、彼等と日本人との關係を次第に明らかにすることが出來た。

しかし何といつても、レイタオにおける人間生態といふものの略ゞ輪廓がつかめたのは、實はずつと後に山から下りて、再びレイタオを訪れた時であつた。山へつれて行つたマタラニーム村出身の人夫たちがその良き仲介として働いたからである。

人夫を募集するには、村の駐在所へ頼んでおけばよかつた。早速われわれの必要とする島民たちが徴用されて、出發の日の朝、宿舍まで出頭して來た。人夫頭として、山にかけては島内隨一の經驗者といふアレックをコロニアの下山田鑛業所から借りることになつてゐたが、彼は來られなくなつて、その代りとして、アレックの指名によつてマタラニームのカテルジャンといふのがやつて來た。三五才、堂々たる體格である。その下に五人の島民が人夫としてつくこととなつた。かくて八月二一日、隊員六人に人夫六人よりなる隊は、愈ゝ人里を離れて森林の中に入るために、レイタオの宿舍を出發した。

十一

社宅の間の小路をぬけると、裏はひろびろした甘蔗畑であつた。雨の日の内地の秋を思ひ出さすような涼しい夕方などには、思はず薄の原とも見まがふ風に、甘蔗の金色の穗先がひらひらとゆれてゐる。レイタオから山に入る道は、その甘蔗畑の中の小徑をぬけて、ニイン川を渡り、そして、全く突然に次の段面への急激なジグザグ登りとなつて、ネーピッチの小屋へ通じてゐる。畑の小徑から見てゐると、その最初の急坂をのぼる小徑の切り開きの赤土のジグザグ線が、臺地の線の中に消えてからも、更にいくつかの段面が重なり合つて、その上はるかにネーピッチの高原が横たはつてゐた。そして、山麓までの平地のまつすぐな軌道の上を、背中一ぱいの大きなルックサックを背負つたわれわれの人夫たちが、間隔の廣い一列縱隊をつくつて、ゆつくりと歩いて行くのが見えた。

マタラニームの平野を貫流する最大の川ニイン川(セニペン川)の鐵橋をわたると、島民リアンテルの椰子林があり、われわれは小憩してまづ椰子の果汁でのどを潤した。この島の平地歩きには水筒は不要であつた。何故ならば、海岸地方至る所に豐富

な椰子の木が、その幹もたわわに巨大な水筒をつけてゐるのだから。しかしながら、椰子に限らずパンノキなどにしても、その所有權は確定してゐるのであるから、誰がどの木の實でもとつてよいといふわけにはゆかない。われわれの場合にしても、所有者の島民と知り合ひであるか、さもなくば一應の交渉の後に、この天然水筒を飲みほしたのである。何れの場合にでも、彼等島民の大好物である煙草――それも「興亞」などといふ安煙草ではだめで、必ず「金鵄」であるが――なり何なり、それ相應の禮が必要である。ココヤシが栽培植物である以上、かような事情は熱帶何れの地においても大して變りはなからうと思ふ。

島民は、椰子の實をとることを命ぜられると、大ていどの木の幹にも刻んである足場をつたつて、身輕に頂上に達し山刀でその實を切り落す（第二九圖版1參照）。落下した果實は左の掌にのせられて、その一方の端が刀の二三擊ですぱりと切つて落される。露出した内果皮に最後の一刀が注意深く入れられると、内に充滿した甘い果汁が勢よく水しぶきを上げて迅り出るのである。われわれは、それをうけとり、兩手で抱へて、胸の上にだらだらとこぼしながらも、息をもつかずにぐいぐいと飲み干す。椰子の果汁が喜んで飲めるようになれば南洋馴れも一人前だといふことを聞くが、はじめのほどは一寸その石鹼くさい臭ひが鼻について、われわれも一個の實すら一氣には飲めなかつたものである。それが次第になれて遂には三個まで一時に飲み干す猛者も出現した。果汁を飲んだあと、實は斷ちわられて、その中の軟かいコプラがわれわれに更に快い味覺を與へてくれる。

傾斜地に入ると間もなく、叢林をふみ荒らした泥道が出たらめに錯綜してゐた。水牛の牧場だといふ。一帶に丈の低いカラオの林で、日蔭のない急斜面のむされるような暑さに、われわれは瀧のように汗を流した。森林は、その牧場の上限、標高一五〇米あたりから始まつてゐた。大して丈の高くもない喬木林にまじつて、ぽつぽつオトコヤシの姿も見えはじめた。折から襲つて來た猛烈なスコールに、島民たちは早速その稚樹の大きい葉片をちよんちよん切りとつて、雨傘代りに頭上にかざした

（第二九圖版2參照）。

本格的な山地林のはじまるまへに、數町の間、明るい羊齒地を通つたが、ここは膝ぐらゐまでの羊齒で全面が蔽はれてゐて、それにまじつて所々まばらにマリアナノボタン等の小灌木が生育してゐるばかり、地表には二・三〇糎も羊齒の枯葉が堆積してゐて腐植をつくつてゐる。かような羊齒地はすでに、春木村でも、レイタオでも類似のものが觀察されてをり、本島植物社會の遷移上その占めるべき位置と、存在の意味については、山に入るまへにもすでに幾回か論議が重ねられてゐたものである。（第七圖版1參照）。

森林に入つてからは、われわれはいよいよそがしくなつて來た。數人で手わけして道の兩側にならぶ樹木の種類別統計をとつた。目測五米以内の幅に含まれるすべての樹種と員數を記錄し、その百分率を計算することによつて森林の大略の定量的組成を知ることができた。喬木の樹種はトオン、セタック、オトコヤシが壓倒的に優勢であり、その樹高も著しく增して來た中層には三、四米にも達する途法もなく巨大な羊齒が見られ、更に下層にはタコノキや、スゲの類があり、その餘地の殆んど全面を蔽うて、大小さまざまのオトコヤシの稚樹が密生してゐた。

最後の段面に上る坂の途中、一とほり森林のトランセクトも終りをつげて、展望の利く明るい場所に出たとき、われわれは背後の海の方を見かへつた。太平洋は、一つのうねりもなく、鏡のように、或ひはうすく或ひは濃く、樣々に雲の色をうつして、にぶい煙銀に光つてゐた。島をとりまくリーフが、美しい曲線を海の中に細々とえがいてゐた。海岸からは、すぐに濃綠のマングローヴの密林が、そして更にそのあとには甘蔗畑が、こんな小さな島の一部とも思へぬくらゐ廣々と展開してゐて、「沃野」といふ字を思ひ起させるほどであつた。

すつかり雨にぬれて、一寸觸れればはらはらととび散るほどたくさんの水たまをつけてゐる柔かい禾本科の草むらの中を、

道は最後の登りをのぼり切つて、ぱつとひらけたネーピッチの臺地に達した。草むらの水たまをとびちらしながら無數のイナゴがとび立つた。何十羽もの燕がすいすいと道の上四、五尺の所をとび交ふてゐた。小屋に近づくと、山の中には不似合な美しい白塗の百葉箱がまつ先に目に映り、その後に柔かい芝生の中に、ネーピッチの小屋が立つてゐた。夕暮が急速にやつて來つつあつた。靜かな夕暮である。雲が、ナナラウトの連峰を音もなく包みはじめてゐた。人夫たちは小屋の緣側に荷物を下すと、指示に從つて默々と炊事の用意にとりかかつた。

五時一〇分前になると、夕暮の靜寂を破つてチッチ蟬（*Aresytasia godeffroyi* DISTANT）のけたたましいコーラスが湧きおこつた。この蟬は、この島の山地のどこでもゐるもので、この時刻になると實に正確に鳴きはじめる。最初定刻に氣づいた一匹が森のどこかで歌を始めると、やがてそれに誘はれて、あちらから一匹、こちらからも一匹と聲を合はせはじめ、次第に數を增して森林中の大合唱となる。そして、それが一〇分間の後にはぴたりと終つて、再びもとの靜寂にかへつてしまふのである。

人夫たちが、夕食のお菜にやしたけをとつて來た。やしたけといふのは、オトコヤシの新芽である。ずゐ分種類の多い椰子の中でも、オトコヤシはポナペ島の特產種で、しかも山地にある椰子は殆んど全部この種類といつてもよいぐらゐである。十數米の高さにぱつと開いた傘形の葉のまんなかから、まるでアンテナのように新芽が高々とまつすぐにのびてゐる。木を伐り倒してその新芽を採り、表皮を除くと、つやつやした象牙色の水々しいやしたけが現れてくるのである。形も、味も、一寸筍に似てうまいものであつたが、それがやしたけの語原であらう。新鮮な植物性食料として甚だ美味なものであるが、それだけを採取するために、一本のオトコヤシの全生命を奪はねばならない。一時は濫伐の結果、この特產植物も低地では絕滅に瀕したので、今では無斷採取を禁ぜられてゐる。

草の間で、虫がはげしくないてゐた。小屋の窓からは、炊事を急ぐ人夫たちの靜かな歌聲が、ランプの光とともに、濕つぽ

い夜の闇の中へ溶けるように流れ出て行つた。

十二

われわれの小學校の教科書は、「スヾメガキマス」ではじまつたが、南洋のそれには、「スヾメ」は「ミツスヒ」で置きかへられてゐる。さし畫にも、ブッソウゲにとんで來たミツスヒが畫かれてゐた。ミツスヒ *Myzomels rubrata* は南洋でも、動物地理學上のオーストラリア亞區に限られた種類で、カロリンにはどこにでも極めて普通なものである。ネーピッチの小屋の近くにもこの鳥がゐて、われわれが到着した翌日も、朝のすがすがしい太陽をあびて散歩してゐると、叢林の中から、翼と尾を除いては殆んど全身燃えるような緋色の、鮮麗なこの鳥が數羽、ばたばたととび立つのに屢〻出會つた。そのような所々の僅かな叢林をのこして、四〇〇米餘りの高さのこの高原は、ぎつしりと生えこんだ降雨林中に、ぱつとひらけた氣持のよい芝生の原であつた。熱帶產業研究所の試驗栽培地であるこの土地には、二棟の小屋を中心にして、コーヒーや、キナなどの試作植物の苗木が、小面積ではあるが栽培されてゐた。ミツスヒの他にも數種の鳥がよく小屋の近くを訪れて來たし、この島には珍しく大型のヤンマが、すいすいと虫を求めてとんでゐることもあつた。

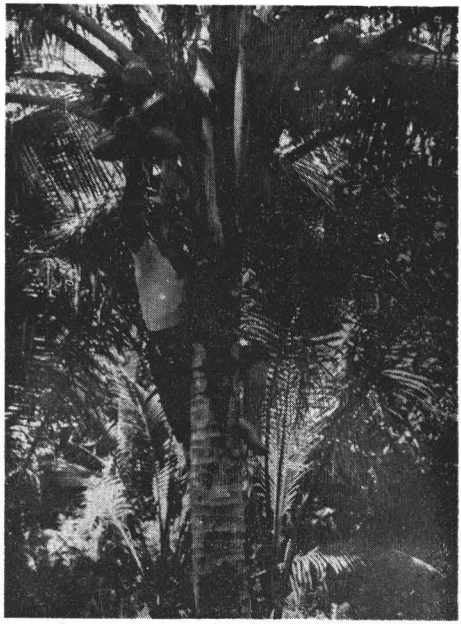
ネーピッチは、臺地それ自身が廣くてまるい分水嶺をなしてゐる。われわれはその鞍部へ、北側のニイン川上流から上つて來たのであるが、その反對側は、臺地から突然急斜面をなして落ちこんで、オネ川源流をつくつてゐる。そちらへ下りて行くと、間もなくいづれはわれわれも訪れるであらう所の、オネの靜かな部落に達するのである。鞍部から、そのままのだだつぴろさでゆるい尾根がつづき、密生した森林が島の中心のナナラウト山頂に向つて連なつてゐた。此所から見ても、大ていの時

にはその尾根すぢも深い雨雲に蔽はれて姿を見せなかつたが、ときどき雨上りにはさーつと霧がはれて、ナナラウトに近い山腹の、マタラニーム平原に削落する玄武岩の柱狀節理をのぞかせてゐる急斜面が、ちらと姿を見せた。

われわれの次の前進根據地は、ナナラウト山頂からキチー側に、少し南西に下つた所にあるといふ岩小屋の豫定であつた。森林生態に關する問題は、すべてそこを中心にして殆んど一擧に解決されるはずであつた。高さによる森林帶の存否、島内の森林分布の展望、山頂現象、その他の問題のためには、丁度このような山頂部附近に恰好の岩小屋があるといふことはわれわれにとつて甚だ都合のよいことであつた。だからネーピッチについた翌日、早速その岩小屋を見つけ出すために、森下・吉良・川喜田の三人が、人夫五人をつれて出發したのである。だが、その日は都合惡く雨勝ちであつた。彼らは多量の荷物をもつて雨にぬれそぼちながら森林の中を進んだが、殆んど山頂に達しながらも立ちとめてゐた雨雲のために展望利かず、遂に頂上平坦面の一角に掛小屋をつくり、そこに荷物をのこして、全身泥と汗にまみれて夕方暗くなつてから引き上げて來た。岩小屋は發見出來なかつたけれども、この偵察によつて山頂部一帶の地形の凡その概念が得られた。

翌日も岩小屋發見のために再び偵察隊が出ることとなつた。昨日に代つて、中尾・梅棹が、人夫中の年長の二人をつれて出發した。しかし、不幸にもまた雨が降つてきた。實際山稜の森林内では、毎日々々雨のふらない日は殆んどなく、この日も降つては止み止んではまた降つた。偵察隊は今回はキチー川源流地方をかなり下降して、遂に話に聞いてゐた目標の一つである、アイボリ(象牙椰子)の林にまで下り、附近を探索したが、結局またもやなす所なく引き上げざるを得なかつた。如何にその岩小屋が大きいものであらうとも、かくももつれあふ植物の中にあつては、たとへその範圍が一粁四方と限定されてゐたとしても、われわれの如き人數と時間ではその發見は殆んど不可能であつたらう。

日暮前のチッチゼミの聲の中を一行が引き上げて來ると、人夫頭のカテルシャンは、明日、オネから山に詳しいアンドレア



1. 椰子の實を採る
椰子の實をとることを命ぜられると、島民はするすると樹をよぢて行つて實を切り落す。

2. 椰子の葉の傘
ものすごいスコールの襲來とともに島民たちはオトコヤシの稚樹の葉を切りとつて頭上にかざし、しばしの雨宿りをする。

1. オホタニワタリの着生

2. ナナラウト山頂附近にて
明るい濕地。山頂林にはオトコヤシが高く挺出してあるのが見える。

スといふ島民をつれて來ることを申し出た。この男ならば岩小屋の所在をよく知つてゐるから間違ひないといふのである。そこでその申し出が受け入れられて、翌日、森下・吉良・梅棹はカテルシャンとともに、アンドレアスを傭ひ入れるためにオネに下つた。アンドレアスは明日早朝、別の道から山に上り、山稜の途中でわれわれを待つことを約した。

この日、われわれは人夫六人のうち三人をレイタオにかへし、カテルシャン・ウリアム・ヨアケムの三人だけがその後もわれわれにつき從ふこととなつた(第一八圖版參照)。

島民人夫については、少しくのべておく必要があるように思はれる。われわれは京都出發前にも、また南洋に來てからも、人夫としての島民については種々の面白からぬ噂を耳にしてゐた。南洋土人といへばまるで食人種か、亂暴極まりない野蠻人のようにいふ內地での臆說は論外としても、われわれの聞いたのは第一にその體力の貧弱さについてである。せいぜい十二、三瓩位しか荷がもてないとか、長期の山地勞働にはとても耐へ得ないとか聞いてゐた。更に、彼等の精神的、道德的な評價は通例著しく低いものであつた。責任觀念の缺除、忍耐心なきこと、著しい勞働嫌惡など、いづれも山地での探檢調査の人夫としては全然不適當な性質ばかりである。そしてこれは素人のみでなく、山地で仕事をした人々によつてもまことしやかに傳へられてゐた。だが、われわれの經驗からいへば、これに對する責任の一半はその指導者の側にもあるようである。

人夫の問題に關してわれわれがとつた方策とその結果は次のようなものであつた。一般に、仕事に對する適・不適の個人差を無視した人夫募集方法は、多分に危險性をもつものである。われわれは島內最優秀といはれるアレックとそ手に入らなかつたが、その代りにカテルシャンを人夫頭として指名で傭ひ入れ、その他は彼の撰擇指名に委せた。それも實際に山地で是非必要な人員よりも多くを一旦傭ひ入れ、われわれ自身による數日の觀察によつて、その働きぶりから判斷して上述の如く篩にかけて三名をのこしたのである。そしてこれは非常に成功であつた。體力の强い、精神的にも優秀な、そして何よりも山で働く、

ことの眞實にすきな連中がえらばれたからである。次に彼等の特殊な性質をのみこんで、よろこんで働けるようにしてやることが必要であつた。彼等自身は何れも村では所謂農耕業主であり、金錢のためには毫もこのような勞働の必要を認めてゐないにも拘らず、駐在所の命令によつて徵用されて來たものなのであるから、まづこの事情をよく呑みこんでやらねばならぬ。彼等は生來極めて朗かでユーモアに富んだ人種であり、われわれがそれを認めてある程度打ちとけてやれば、大いによろこんで和氣靄々のうちに働くのである。そして彼等は、その主人に心服すれば驚くべき從順さを示した。

かくて、彼等は體力的には三〇瓩以上もの荷物を常に運びまわるに十分であり、しかも精神的にも忍耐力もあり、終始一言の不平をも口にしなかつた。質朴な彼等には、氣の利かない點が多少はあつたのは無理からぬこととして、その他の點では與へられた仕事に對しては常に責任をもつて當つた。ある時などは急坂においた荷物が轉げ落ち始めると、島民の一人は危險をも顧みず飛鳥の如く身を躍らしてそれを捉へ、自身は足に傷をうけたような事もあつた。岩屋發見のために、自發的に案内者を推薦するなども考へてみればなかなか良い所であり、殊に、通路の探索に關しては驚くべき熱心さをもつてこれに當つた。要するに彼等は、われわれが原始民族として、また屢〻耳にした惡評を基として、彼等に期待してゐたものよりもはるかに優秀であることを身をもつて示し、雇傭者側の不馴れや失敗がその大きい原因である所の同族の無實の罪を立派に拭ひ去つたのである。われわれは、更に南方の、そして更に未開な種族の間にふみ入る際の、優秀な下士官級の人物として、その風土に對する適應性とともに、彼等の素質をかなり高く評價してもよいと思つた。

二三日の朝、例によつて好天にはなりさうでなかつたが、われわれは豫定通りネーピッチを出發した。ナナラウトへの主稜には、アィバカップ、ニイナニなどと呼ばれるいくつかの小峰が隆起してをり、それらの頂をむすんで略〻尾根づたひに細々とした踏みあとが通じてゐた。アィバカップの頂きの附近まで行くと、よれよれのシャツに半ズボン、脛にはゲートルをまき

戰鬪帽をかぶつた島民が、木を細くけづつた槍をたづさへて立つてゐた。傍らには、大きい赤犬がうづくまつてゐる。これがアンドレアスであつた。彼はすでに用意をととのへてオネのモコット部落から、先まわりしてわれわれを待つてゐたのであつた。彼はわれわれを認めると帽子をとつてうやうやしく一禮し、早速大きいルックを引きうけて隊の先頭に立つた。これ以後、人氣男アンドレアスの華々しい活躍が始まつたのである(第二八圖版2參照)。

道は、陰氣でしめつぽい森の中をくねくねとまがりつづいた。蘚苔林の中では、すべてのものが體一ぱいに水をふくんでゐるようであつた。木の幹にも、地上にも、垂れ下つた氣根にも、そして木の葉の表面にすら、種々樣々の恰好の苔が、寄主の肌がうかがひ得ぬまでぎつしりと着生してゐて、それは通常の森とは全く異なつた景觀を呈してゐた(第七圖參照)。折から、雲間をもれる陽の光に、その苔が薄明のようにうつすらと照り映えると、森の中は一齊に金鶯色に光芒を發して輝き、異樣なお伽話の世界に迷ひこんだようであつた。この壯大な金鶯色の世界の最下層の雜草や椰子の稚樹の巨大な葉片をゆれさわがして前を行く隊員の白いヘルメットが、ときどきすーつと現はれてまた苔の間に消えて行く。

樹の枝や幹からは、房々とした苔がたれ下つてゐるばかりではなかつた。ちよつとした木の凹みにも、オホタニワタリなどの巨大な寄生植物が根を下して、無氣味な觸手のような葉片をひろげてゐた(第三〇圖版—參照)。ときには一本の木の幹の中ほどから全く別の木が生え出して、寄主とその高さを競つてゐるといふ奇景もある。ナンヨウリンゴ或ひは島名カカラックと呼ばれる木の太い幹から全く唐突にごく短い細枝がつき出て、そのさきに直徑二、三糎の眞赤な可愛いらしい果實をこぼれんばかりにつけてゐた(第五圖)。フィクス屬の巨木には、はるか高くから太い鋼線のような丈夫な氣根が何本も〳〵張り下されて地中深くまでしつかりと食ひこんでゐる。相かはらず雨は何度も降り注いだ。降雨中も行進を止めるわけにはゆかないので、數人は不自由をしのんで傘をさして歩いた。地上に落ちた雨は僅かな凹みにも水溜りをつくり、その水溜りはすぐにあふ

れて小流をつくる。このような小流が、尾根の上にも拘らず何本もわれわれの道を横切つて流れてゐた。坂道は一雨ごとに小川となり、その上に廣い滑かな椰子の葉柄が落ちてゐて、うつかりその上に足を置かるものなら忽ち顚倒した。雨が止んでからでも、すでに樹上で朽ち枯れたその葉柄が、何の刺戟もないのに突然に上から落ちて來て、ばさつといふ大きい音を立てて靜寂になれたわれわれを驚かした。

山稜は次第に痩せて細くなり、道は主としてその山稜の少しく下をからんでゐた。そしてその道が時々山稜の頂きに出て、マタラニームの平野が木の間越しに見える場所では、島民たちは忽ち四周の雜木を切り拂つてよき展望臺をつくり上げ、村の方に向つてよく透る聲で哀調を帶びた歌をうたひはじめた。

高度が增してくると、山稜部の樹木は次第にその樹高を減じ始める。樹種も、下の臺地では壓倒的に多いトオン、セタック、オトコヤシの外に、更にいくつかの灌木性のものが加はつてゐた。數ヶ所には小區域ではあつたがタコノキの純林が見られた。その中では殆んど全く下生えはなく、まさに蛸が足をひろげた恰好にその幾本もの氣根をふんばり、それが複雜にからみ合つて、森林の他の部分とは全く別の一小世界をつくつてゐる。われわれがその中にふみこむと、丁度頭上を、密生したその葉が屋根のようにおほひかぶさり、錯綜した氣根は進行を妨たげ、奇怪な迷路を行くようであつた(第五圖版2參照)。

先頭を進んでゐたアンドレアスは、ニイナニ峰の肩からキチー川の谷に向つて下降を始めた、それは急斜面の滑りやすい斜面であつた。尾根道は、偵察隊が二回も往復した後であるから、比較的よく踏まれてゐたが、この下降路は、殆んどあるか、なきかのもいで、アンドレアスならでは識別し難かつたであらう。見る見るうちに森林は再びその樹高を增した。

ところどころにある濕地では、スゲや、タコノキが密生してゐて、その鋭い鋸齒のある葉片はわれわれを惱ました。そんなところでは、島民はその山刀を大いに活用して、それらの植物を左右に薙ぎ拂つて道をあける。やがてキチー川の源流をつく

る急流に出て、更にトラバースをつづけ、同じような流れを數回渡つて、アンドレアスは遂にわれわれを待望の岩屋に導き入れた。そしてその岩屋の位置といふのは、實に殘念なことながら、第二回目の偵察隊が引つかへした地點から一〇〇米とは離れてゐなかつたのである。熱帶降雨林とはかくも見透しの利かない曲者であつたのだ。

衣服は下着まで完全に水を吸ひこんで氣持ちわるく肌に密着し、われわれは快適に乾燥したこの岩小屋ですぐにも休養をとりたかつたけれども、先日、第一回偵察隊が掛小屋をつくつて來た頂上平坦面の一角へ荷物をとりに、時を移さず隊員三人と人夫たちは、折からふつて來た土砂降りの雨をついて上つて行つた。そして數時間の後にはその荷物もずつかり運びこまれ、われわれは乾燥した衣服と着かへて愉快に談笑してゐた。

十三

一九一〇年は、ポナペの歴史において最も陰惨な年であつた。有名なジョカージ叛亂が勃發したのである。當時のドイツのあまりにも舊慣を無視した統治に激昂した島民たちが、折からジョカージ村で擧行された道路開通式に參列してゐたドイツ人を、殆んど一人のこらず虐殺したのであつた。だが、叛亂に對しては統治者の制裁の手は峻烈であつた。叛亂に參加した島民は、一人また一人と捕へられ、殺され、或ひは遠い孤島に流された。島民たちは、官憲の眼をのがれて森の奥深く逃げこんだのであるが、追求の手はゆるまず、執拗極まりない反抗にも拘らず、遂に全島は陰惨な血の色に彩られるに至つた。そして、今われわれが居を占めてゐるこのナナラウトの岩屋は、最後まで反抗しつづけた首魁のかくれ家として、その血腥い事件の大詰めの舞臺であつたといふ。

岩屋は、巨大な岩盤が斜面から突出することによつてできたものであつて、その下は平らにならされ、十五疊敷ばかりの廣さをもつてゐた。そしてその天井は著しい傾斜をなしてをり、そこまでの高さは端の方では五米近くもあつた。三方が開け放しにも拘らず、豪雨の時にも雨の吹き入ることはなく、その床の土は森林中でのただ一ヶ所の乾いた土であつた。ときどき山へ獵に來る島民たちによつて、利用されるらしく、彼等の炊事法たる石燒き用の石も具へつけられ、すぐ前には數株のタロ芋さへも植えつけられてゐた。水は、眼下のキチー川へ下りるまでもなく、岩屋の横二〇米ばかりの所を、清い小流が流れてゐた。岩屋の前には、直ちに巨木の生ひしげる森林がつづいてゐるが、その梢越しに、對岸正面に高くそびえ立つてゐるナナラウトの頂がよく透けて見えるのであつた。われわれは、岩屋の壁にもたれて、防ぎようもなくわれわれを濡れねずみにしてしまふ雨からも解放され、その雨が一入猛烈さを增すたびに姿を現はしたりかくしたりするナナラウトの急斜面を、今は心のどかに眺めてゐればよかつた。

岩屋に到着した翌々日、われわれはナナラウト登頂のために、早朝からの雨を衝いて出發した。從者としてはカテルシャン一人をつれた。岩屋から頂上までは、標高差三〇〇米ばかりあつて、所謂頂上平坦面までは相當な急斜面がつついてゐる。頂上平坦面といふのは、ネーピッチから連なるものと、キチ川右岸をつくるものと、もう一つはナット村の方角へ北にのびるものとの、この島の三つの主稜が合する地域で、かなりの廣さにわたつて殆んど起伏のない臺地を形成してゐた。その三つの主稜のうち、最後のものは、嘗つて第一回の上陸の際に、われわれの隊員の一部がコロニアからナナラウトに登頂した時のルートに選ばれたものであつた。

平坦面は、大部分比較的小さな木でおほはれてゐた。トオンなどの、本來ならば亭々とそびえ立つはずの喬木さへも、此所では屈曲した枝ぶりの矮生樹となつてゐた。木性羊齒が何にもまして密生してゐる。部分的に一米ばかりのスゲの類と多少の

農業經營費	二五四・四五
甲家計費	六五七・四五
乙家計費	五二四・一一
甲支出（甲家計費ヲ加ヘタルモノ	一一五九・四四）
乙支出（乙家計費ヲ加ヘタルモノ	一〇二六・一一）

（C）収支比較

先づ前記の甲収入と甲支出を毎年及び各農家について見れば、第一農家が昭和六年、第二農家が昭和四年、第四農家が昭和二、三年に収入不足を見るのみで、他の年には皆収入の方が多く、毎年一戸平均にすれば、五〇〇圓の剰餘を見たことになり、極めて有利な經營をしたことになる。しかしこれは前述の如く甲収入及び甲支出はそれぞれ農業經營の結果並びに目的以外の金額を含んで居るので、これらを省いた乙収入及び乙支出について檢討して見る必要がある。

その乙収入は甲収入に比してずつと小であり、乙支出も甲支出よりやや少額で、一戸平均毎年収入一二〇〇圓、支出一〇〇〇圓餘、差引一八四圓餘の剰餘を有するのみとなる。しかし全くの處女地にいはば暗中模索して得たこの試驗結果は、良好といふべきであらう。

もつとも乙収入中にある毎年の調査手當は、四戸とも昭和二年の五九五圓より、昭和七年の一三二圓まで毎年漸減したが、なほ六年平均三九一圓餘となることは前に掲げた表の通りである。今これをも乙収入より除ければ、この剰餘金も消失して結局二〇六圓餘の缺損となるが、この計算は南洋廳を背景とし、その命のままに働いた試驗農家には矛盾し、酷に過ぎるのはいふまでもない。

二　特定農家の成績

以上の昭和二年より昭和七年に到る四試驗農家の他、上原氏は南洋廳が昭和一一年にパラオに八戸、ポナペに九戸の特定農家を選んで行つた經濟調査をも檢討して居られる。これを次に簡單に述べて、植民地の發展といふようなものを知りたい。

これら兩島計一五戸の農家は入植後いづれも三年以上の經驗を有するもので、パラオでは主に蔬菜、鳳梨、甘藷、タピオカ（キヤッサバ）を八戸平均二町五反三畝に、ポナペでは蔬菜、コーヒー、棉、甘藷を九戸平均四町二畝に作附けしてゐる。次に農家經濟のうち先づ收入を見る。

第37表　特定農家の現金收入平均

		パラオ	ポナペ
農業收入	耕種	四九二・五四圓	九四三・三六圓
	畜産	一〇五・四四	一三三・二四
	其ノ他	二・四二	四・一四
	計	六〇〇・四〇	一〇八〇・七五
農業外收入	勤勞	一五九・一九	一二二・〇〇
	勤勞外	九二・八三	一九八・五九
	計	二五二・〇二	三二一・四五
總收入		八五二・四三	一四〇二・二〇

これらの細目の中、勤勞收入とは人夫として道路工事などに出たもの、勤勞外收入とは農事奬勵金などである。注意すべき

はいづれの農家も前の試驗農家におけるような手當は一切受けてゐないことである。次にはパラオとポナペの收入を比較するといづれも後者が大であることで、これは耕作面積が前者二町五反、後者四町、家族數がそれぞれ五・一人、五・五人の差にもよるであらうが、かりに一町歩當りを見ればやはりパラオ一九七圓、ポナペは二三六圓となつて、後者が遙かに收入が多い。

現金支出は次の通りであるが、注目すべきは家計費に對して飲食費がパラオ、ポナペ共に、それぞれ五六・六%、七一・七%となつてゐて、前の試驗農家の四四・一%を遙かに越えてゐる。これらの計算は同じく現金支出のみで、現物支出を換算してゐない筈だから、時代の變化、即ち、昭和初年には多少とも自給を志したのに對して、昭和一一年頃は內地との交通も多くなり、自家食料は殆んど全部移入に俟つようになつたためではなからうかと思ふ。なほ支出でもポナペがパラオより多くなつてゐるのは注意を要する。

	パラオ	ポナペ
農業經營費	一九五・九五圓	三二六・三九圓
家計費	五五三・五九	八七三・九四
內飲食費	三一三・四三	六二七・一九
支出合計	七四九・五五	一二〇〇・三三

現金收支では臨時的の收支を省くと各戸平均は次表の通りである。

第38表　特定農家の現金收支平均

	パラオ	ポナペ	平均
收入	八五二・四三圓	一四〇二・二〇圓	一一〇八・九九圓
支出	七四九・五五	一二〇〇・三三	九五九・九一
過不足	一〇二・八八	二〇九・〇一	一四九・〇八

かくて昭和一一年においては、パラオ、ポナペの上述の農家は前の試驗農家の如き手當は全く受けず、僅かの農事奬勵金を得たぐらゐで一〇〇圓乃至二〇〇圓の剩餘を殘してゐるのである。

三　模範農家の成績

次に旅行中得た昭和一四年度の農家經濟調査[7]を略記する。これはパラオ及びポナペの各村毎に模範農家各一戸を選んで調査したもので、大和村のみは調査の年の九月に入植したため、成績は擧らないが他はいづれも前述の二調査より遙かに良好な成績を示してゐる。

第39表　植民地移住者收支表（昭和一四年一月一日―一二月三一日）

島名	パラオ				ポナペ
村名	瑞穗村	朝日村	清水村	大和村	春木村
世帶人員	三人	三	四	三	五
移住年月日	昭和一二年八月一三日	一一年一〇月一〇日	一一年三月五日	一四年九月一七日	九年二月一〇日
貸付面積	四町六	五・二	四・八	五・〇	四・八五
利用面積 鳳梨	一町〇	一・五	二・六	一・〇	水稻 四・〇
利用面積 キャッサバ	〇・五	—	〇・七	〇・五	〇・二
利用面積 蔬菜	一・一	〇・八	〇・四	〇・二	〇・二
利用面積 果樹其他	〇・四	〇・二	〇・二五	—	〇・一
利用面積 計	三・〇	二・五	三・九五	一・七	四・五

収入	耕種	一三七六・八二圓	一八四六・三四	一四九三・二五
	畜産	—	二八〇・〇〇	二九四・九〇
	其他農業	—	七二・五〇	一〇八・〇〇
	勤労	五二・五〇	八七・八二	一〇・八〇
	勤労外	一八・五〇	八・〇〇	二七・三三
	計	一四四七・八二	二二九四・六六	一九三四・二八
支出	経営費	二一一・七五	三〇二・二七	二六〇・四六
	家計費	五〇三・八五	九七〇・一四※	七六四・六三
	償却金	三〇・〇〇	四〇・〇〇	四五・〇〇
	計	七四五・六〇	一二一二・四一	一〇七〇・〇九
差引		七〇二・二二	一〇八二・二五	八六四・一九 不足

四〇・〇	一二二五・〇〇	
—	七五〇・〇〇	
—	七一三・〇〇	
三〇・〇〇	二〇〇・〇〇	
—	—	
七〇・〇〇	二八八八・〇〇	
—	七〇三・九八	
三九〇・〇〇	一三九五・八五	
—	二五一・二〇	
三九〇・〇〇	二三五一・〇三	
三二〇・〇〇	五三六・九七	

※ 八七〇・一四ノ誤カ（著者）

収支比較で注目すべきは入植新しき大和村の農家を除いては、パラオの各村調査農家が昭和一四年に七〇〇圓から一〇八〇圓の残金をあげてゐることである。しかも、農業手當或ひは奬勵金が「其ノ他農業收入」に含まれてゐるとしても、これは全收入に比して極めて少ないし、且つ支出の項に借入金と思しきものに對する償却金が含まれてゐることは、この差引きが眞に純益であることを示してゐる。春木村の一農家の例はパラオに比してやや劣るが、ただ一軒では、前述の第二の調査結果、即ちポナペがパラオに比して殘金が多いといふことと逆になつても致し方がない。殊にこの農家は春木村で水稻試作に熱中してゐると噂されるその篤農家らしく、そうとすれば、差引きがやや少ないのも肯かれる。

四　要　約

以上農家經濟調査の三例は、調査法を異にし、內容の詳細な說明を缺く點もあるが、その收支比較を見れば後年に到る程成績をあげてゐることは大體認めて差支ないと思ふ。これは農業經營法はもとより、道路、舟車、組合、製造工場などあらゆるものが後ほど整備し、且つ民間の南進熱や軍事基地的利用が强まるほど農產物の販路が安定し、收入も多額になつたためであらう。このような收入增加が何ほどまで續くかは不明であるが、大東亞戰の迫るとともに農家が多分に群島の自給自足的方向を取り來つた故、この線に沿ふ農家が利益をあげ且つ一層安定した收入を得ることは疑ひない。昭和一六年の半ばに一〇日間で野菜の賣上五〇〇圓に達した者が瑞穗村にあつたといふことなど、この傾向の顯著な例であらう。

しかし注意すべきは農業は本來かかる投機的な巨利の對象ではない筈であり、入植以來今日に到るまで他所へ動かずにゐる者は三分の一ぐらゐにすぎぬといふような話をきくと、南洋廳の植民政策としてはやはり滿洲開拓民に見る如き精神訓練を施すのでなければ、或ひは不健全な農民を作り出すことになるのでなからうかと懼れる。

第十四章　南洋群島將來の展望

大東亞戰爭の戰果着々擧がり、外南洋における既往の日本人の開拓が、晴れてその意義を高揚し、更に未開拓の廣大な地域が、日本人及び東洋人の前に展開されて來つつある今日、內南洋は、將來に對して如何なるところにその意義を見出すべきであらうか。

一　可容人口

それには先づ現在の群島の土地利用度がどの程度であり、なほ將來に對して如何ばかりの餘裕を殘すかを一應問題とせねばならぬ。いま群島の人口密度を見ると表の如く、サイパンが七五・五で最高を占め、トラックは一四・四で最小、群島平均は六〇・〇になる。

この群島が、高密度で有名なジャワ及びマヅラ(三一六)と同じ土地力を有すると假定すれば人口六七、九〇八四となり、今日の人口に加ふるに五四、九九八〇人の收容力があることになる。しかしこの假定は不毛の珊瑚礁島を無視する一方、ジャワ土人の低い生活を日本人に强ひることにもなるから、もう少し正確な計算を必要とする。上原氏は島民の生活のために一萬町歩を除いても群島の農耕適地は五萬町歩あり、一戶五人に四町乃至五町歩を分配するとして、五萬乃至六萬人の農業を定着せ

しめることができる。そしてサイパンの職業構成比率を一應完成したものとしてこの農業人口に掛けると、日本人可容總人口は約一六萬人乃至一九萬人餘となり、島民を加へた人口密度は一〇〇乃至一二二となるといふ。

この計算に基づいて考へると、日本人現住人口はその約半分に足らず、あと十萬人餘が入るまでは飽和しないことになる。

二　意義の變化と新生面

量の可能性は一應これでとどめ、質的ともいふべき内南洋の意義は今後如何に發展するであらうか。もう一度今日までの意義を振りかへつて見る。

一、軍事的意義。

二、産業、經濟的意義。

1　日本への砂糖、燐礦、鰹節、コプラの寄與。

2　南洋廳財政への寄與。

三、文化的意義。

1　日本人の熱帶進出性涵養。

2　熱帶學の發展。

第一の軍事的意義は今後も變化はないと思ふ。寧ろいままでの外濠たりし意味が、より大切な内濠の役に變るのではなからうか。そして恰も北滿に多數の日本人開拓民が入るのと同じように、軍事的に直接關係のない在住日本人でも今日より增すべきで、減じてよいとは考へられない。

第二の日本に對する産業的意義は外南洋に同じ産業が勃興した場合、比重が低下するのは止むを得ない。その中でも砂糖、燐礦、コプラは前に見たグラフの如く、いづれも今日最大限度に近づいてをり、しかも外南洋に廉價、優秀なものが多くあるために、日本への比重の低下する惧れが多分にあるのである。勿論大局から見て、保護關稅政策の如き十八世紀的な方法は當然とれない筈だから、この惧れもむしろ甘受し、轉じて福となす決心が必要である。

これに反して鰹節は外南洋に同業が殆んどなく、更にそのグラフの示す如く僅か十年足らずでかくも發展し、その曲線は益々急昇するのであるから、殆んど限度がないものと思はれる。冗談に亙るのが許されるならば、今日まだ日本人に使用されるにとどまる鰹節をまづ支那人、滿洲人の間にも廣め、遂に全東亞全世界に廣め、文字通り味を占めることも惡い夢ではない。勿論このためには鰹漁業の基礎的な研究、技術的發展はもとよりあの節の形ばかりでなく、味を永く失はない粉末の或ひはエキスの如きものにする研究も必要であらう。

第三の文化的意義の中、日本人の熱帶適應力は既に一應、內南洋において實驗濟みであり、それが外南洋進出熱を煽つてゐるのは前述の如くである。故に外南洋へ直接邦人が進出できる今日では特に意義を有しなくなつた。

また熱帶を研究せんとするあらゆる學問の中、既に生物學、特に珊瑚の研究はパラオ熱帶生物研究所で着手され、業績をあげてゐるが、今後更に多數の學問が當然熱帶研究に乘出す場合、內南洋は東京に近いといふような理由から利用される可能性はあるが、一方土地が狹く、特に此處でなくてはならぬものの他は外南洋に取られるものと思ふ。

群島の今日までの意義はこのようになほ殘存するものもあり、消滅するものもあるが、大東亞戰以後新たに生れ出づる意義はないだらうか。試みに東半球の地圖を開いて、橫濱とパラオ、橫濱とポナペを結び、この二線を延長すれば、ニューギニヤはもとより濠洲は西岸まで、東はニュージーランド、ニューカレドニヤ、フィジー、サモア等の島群は皆その扇形の中に入つ

て了ふ。即ちごく近い將來にこれらの土地を日本に結びつけるべき海濱空路及び横濱航路は、厭應なく少なくとも東はポナペ、西はパラオに寄航することになる。今日までの南方航空路がいはば試驗時代軍用時代であり、南洋航路が命令航路であつたことに比して、今日以後のこの自然の勢ひは群島に多くの中繼地としての利點を齎す筈である。

三　現代と群島の動向

最後に内南洋の企業に對し、いささか述べて見たい。南洋航路の高級船員の談で屢〻聞いたこと、また現地でさへ耳に入つたことは「群島には小企業が多すぎる。ひどいのになると東京邊で何も事情を知らぬ資本家を說いて二萬三萬の金を作ると、群島に出かけて何かもつともらしい看板は掛けるが、直きに失敗し、暑さに多少ふやけた頭をかかへて内地に歸り、また他の資本家を說く」といふ。自分はこれが正鵠を得た噂でないことを希望する。しかし、本來天産豐かなる熱帶は比較的危險の少ない小規模經營には何か知ら人間に與へることが溫寒帶に比して多い。從つて、この程度の生産に滿足するなら多數の企業が並存し得る。ポナペのコロニアのみでも會社三〇餘を數へるのは他の理由もあらうがこの例といつてもよからう。しかしこれは寧ろ寄生といふべきではないだらうか。本來熱帶には彼の英國の象徴ともいふべき巨花ラフレシヤをはじめ、多數の寄生植物がある。

滿洲事變以後の國家生活には、かゝる弱々しい獨善的、社會自然的企業は相容れない。現代の希望する企業は日本國家の歴史的使命を強く、廣く顯發し得るものでなければならぬ。完成はせぬが強力な國家經營組織の施されてある滿洲より南洋に出かけて感じた最大の印象は、このように群島の社會がまだまだ前時代に留まつてゐることであつた。戰爭近しとか、また南進とかの非常に高い聲の中にもなほ多分に利己的、寄食的の氣分のみが滲み出てゐて、新時代への思想的追求は殆んど見られなかつ

た。熱帯は本來物質的であり、新時代への轉換は寧ろ北方に較べて一層困難なのではなからうか。内南洋に限らず大東亞南方圏建設において十分戒心すべき點であらう。

引用文献

(1) 南洋廳　南洋廳施政十年史　昭和七年
(2) 松江春次　南洋開拓拾年誌
(3) 矢内原忠雄　南洋群島の研究　昭和一三年
(4) 太平洋協會　大南洋、文化と農業　昭和一六年
(5) 〃　南洋諸島、自然と資源　昭和一五年
(6) 安里延　日本南方發展史　昭和一六年
(7) 上原轍三郎　植民地として見たる南洋群島の研究　昭和一五年
(8) 文部省　南洋新占領地視察報告　大正五年
(9) 山口貞夫譯　オーベルドラリュ　島と人　昭和一五年
(10) 矢野、白崎　日本國勢圖會(昭和一六年版)　昭和一六年
(11) 南洋廳　南洋群島要覽　各年度
(12) 〃　〃　別冊統計表　昭和一五年
(13) 〃　南洋群島植民區劃地移住案内　昭和一四年
(14) 榎本重治　南洋新占領島の現況　大正八年　地學雜誌　三六五、三六六、三六七

第三部　日本人

(15) 福井英一郎　本邦に於ける蒸暑さの分布　昭和一五年　地理三卷四號

(16) 淺井得一　邦人の氣候適應に就いて　昭和一五年　地理論叢一一輯

(17) 南洋廳　植民地概要　昭和一五年七月

(18) 福井英一郎　體感溫度の諸相　地理學評論　一八卷一號

第四部　紀　行

執筆擔當者　梅　棹　忠　夫

一

黑潮をのり切つてからは、海の色は日增しに南海らしくなつてきた。何もせずともその色を見て氣持を休めるためにだけでも、南洋へ行つて見ようといふ人を出現せしめるその色なのである。深々とコバルトをたたへて、むしろ時には薄紫をさへ感ぜしめるような華やかさで、北の海のオホーツクなどの綠藍に近い海の色とは、これはまた確かに强いコントラストである。どことなく白つぽさをもつたはな色は、しかしこれがほんとうにあの有名な珊瑚礁の底まですみ切つて見えるといふ、すきとほつた熱帶の水だらうかと、一寸疑念をもたすほどに、染料をとかしたような一種の不透明さを感ぜしめることは確かであるけれども、舷側の手すりにもたれて、船がうねりを乘りこす毎に、ぐーつと眼前に膨れ上つてくるそのはな色の水塊を見てゐると、やはり船の底の方からわき上つてくる泡粒どもが、水の不透明さの疑念を打破つて、ありありと看取されて、ああやつぱり透明なのだ、と前途に待つ美しいリーフの光景に對する期待に、保證を與へてくれるのだつた。

毎日氣象觀測の時に比較測定されるフォーレル水色の番號が、次第に小さくなつてゆくと同時に、水溫は上昇をつづけて、また、一日六回のその觀測値も殆んど變化を示さぬようになつて來た。そしてとうとう七月二〇日の午後、横濱を出てから丁度一週間目に、右舷はるか前方に、パラオ島の島かげを認めたのである。

われわれの乘つてゐた船は、この內南洋航路の就航船中でも、噸數はやや小さいながらも、最優秀船といはれてゐるパラオ丸であつた。僚船の橫濱丸などにくらべると建造も新しいし、均整のとれた形と、錆びと汚れをおほひかくす鮮かな塗裝は、確かに美しいものであつた。乘船したときも、何だか長途の航海に對する特別の氣持を抱いたといふよりも、瀨戸內海の汽船にでも乘込んだような氣安さを感じたのである。しかしながらわれわれがのりこんでみると、スクリューの眞上の隔離された一角を占領してみたものの、船內は南洋行きの、それも大半は南洋へかへる人たちらしく見受けられた人々の、言語を絕した超滿員には、どうやら兜をぬがざるを得なかつた。船室には天井の送風管から新しい空氣がたえ間なく噴出してはゐたが、かへつてその不自然な風あたりに不快を感じて、われわれに限らず、他の船客たちも、熱帶に近づくにつれて夜間の氣溫低下が少なくなると、そろそろデッキやハッチの上で一日の殆んどをすごすものの多くなつて來たのは當然であつた。われわれの場合は、單に安眠のため夜も室外にねるだけではなく、やはり今までからも靑天井の下の生活に親しんできたものばかりだから、書間も、よほど體の調子を損じた者をのぞいては、殆んどデッキで暮したようなものであつた。三度の食事が終ると、早速毛皮がデッキに擴げられて、その上にのびのびと體を橫たへて、毎日同じような波の起伏を眺めて、大聲で歌をうたつたり議論をしたり、本を讀んだり、毎日々々そんな日がつづくのである。

それでも、こんな野外生活のおかげで、海の美しい景觀——單調な海にも時にはすばらしく美しい瞬間がある——は見得る限り見ることもできたし、また、かくて前途に始めて姿をあらはした島影も、船客の誰よりも早くから發見することができたのである。しかしそれだけに、發見よりいよいよ碇泊に至るまでの待ち時間も、一入長く感ぜられたのであつた。

島は、近づくにつれて急速度に大きくなつてくる。ミクロネシアの名の通り、太平洋中の眇乎たる一小島を、何としても想像せざるを得なかつたわれわれは、始めに水平線上にぽつちりと姿を現はした島を見て、豫期通りであつたといふ感じをもつ

たのであるが、今やそのパラオの本島――それはバベルダオブ島と呼ばれるものであるが――が、實に大きく大きく蜿蜒とつらなつて、右舷間近に、熱帶圏としては今日はまた珍らしく高い波に、大きく上下にゆれてゐるのであつた。

島の價値はもちろんその大小で決定されるものではない。しかしわれわれが日頃いだいてきた氣持からすれば、われわれの活動舞臺は、いつでも心ゆくまで歩きまはれるような廣大な地域であつてほしかつたし、一つにはまた今まで北方大陸での活動に血統的なつながりをもつてゐるわれわれなのであつたから、何としても大海の一粟中でのあくせくとした仕事には、氣のりが薄かつた。隊員中ただ一人、南海の孤島への遠征の經驗をもつてゐる川喜田が、硫黄列島の旅からかへつて來たときに、山頂に立つて四方に海が見えるほどつまらないものはない、と述懐したその氣持は、やはりわれわれに共通なものであつたらう。だから、バベルダオブの島が、案外にも大きく見えてきたことは、その直前にわれわれの下した過小評價にもよるのではあらうけれども、一時は何か妙な安心を感ぜしめたのである。もちろんそれは間もなく再び最初の豫期どほり、とてもわれわれに滿足を與へてくれるほどの大きさではないことがわかつたけれども。

始めから數字的にも明瞭に小さいことのわかつてゐる、ミクロネシアの島ではあるが、未知に對する憧れの人一倍強いわれわれにとつては、そのような小さい島にも一つの大きな期待がかけられてゐた。それは島の小ささをカヴァーしてくれるであらう所の、例へばニューギニアなどといつたほんとうの熱帶諸地方にみられるような素晴らしく豐滿な自然の姿であり、就中もつれあひ、ひしめきあふ巨大な植物の塊、熱帶降雨林の姿であつた。もちろんその本格的なものに接し得ようとは思つてゐなかつたけれども、われわれの目的地であるポナペ島においては、小規模ながらもそのようなものの存在することを聞いてゐたし、われわれは何時のまにかパラオあたりにすら内地とは全くちがつた、その豐饒な自然が展開してゐるものとの、一種の錯覺におちいつてゐたようであつた。從つて、バベルダオブの島が愈〻間近に見えてきた時に、その森林は樹種こそ見なれな

いものであるにしても、その外觀は內地のただの松山とさつぱり變らないのを發見してかなり悲觀させられたのであつた。

われわれが甲板にならんで、始めて見る南洋の島の印象を語り合つてゐるうちに、船はせまい水道をぬけて、パラオの港內へすべりこんで來てゐた。

大切な初印象の日といふのに、この日は朝からうつとうしく曇つてゐた。空も海も色の鮮かさを缺いて、そのためにも著しく感興がそがれたのであつたが、それでも見なれぬ景觀、見知らぬ土地に始めて接するといふことは、誰の心をも浮き立たせずにはおかないものである。われわれは、それぞれに準備をととのへて、迎へに來てくれた南洋興發會社のランチにのりこんだ。この夜は、上陸しても陸で泊れるかどうか、はつきりした都合がわからなかつたので、ともかくも正式の訪問にたへるように、暑いのを我慢して隊長以下內地風の正裝であつた。ところがそのような正裝にも拘らず、われわれは上陸第一夜、否、上陸前に、すでにして南洋名物のスコールの洗禮をうけてしまつた。まさにあつといふ間であつた。二三滴大粒の雨がからだにふりかかつたと感じられると、次の瞬間にはもう瀧つ瀨のような雨で、愈ゝランチが岸について、われわれがほうほうの體で家の軒下にかけこんだ頃には、下着まですつかり濡れ果ててしまつてゐた。南洋の恐るべき雨については、すでに內地で聞いてゐたし、事實われわれの全旅行中、雨は常につきまとふてゐた厄介者ではあつたが、かくも早くその襲擊を受けようとは一體誰が想像したらうか。

京大農學部の出身の、われわれの先輩で、南洋興發の社員なのであるが、われわれと一しよにボナペへ行くためにサイパンからわざわざ出てこられた古里氏が、懸命に奔走して下さつたのであるが、われわれをのせるべき自動車はとうとう手に入らなかつた。われわれは、上陸してからもしばらくは、暗い海岸に建つた何處かの水產會社の事務所で雨宿りをしなければならなかつた。だがスコールが跡形もなく止んでしまふまでは長くはかからなかつた。雨が止むと、眞黑い雲が見る見るうちに遠

くへ移動してしまつて、後には鮮かな星がきらきらと輝き、木々のこんもりと茂つた山が、くつきりと見えてくる。事務所の前の叢から、蟲の音がやかましく聞えてくるのは、何となく秋のようで一寸妙な感じであつた。雨も止んだので、自動車をあきらめたわれわれは、バスでパラオ支廳まで行つた。夜のこととて、支廳にも南洋廳にも人は居らなかつたので、われわれは今宵はゆつくりとあそぶことにきまり、古里氏の案内で町を見物に出かけた。

先ほどのスコールに濡れ果てた上衣が實に不愉快なので、われわれはみんな脱いで肩にかけてあるいたが、街を行く人々を見ると、われわれのようにきちんと上衣を着てネクタイをしめたり、ホックをかけたりしてゐる人は殆んど見當らない。氣候に適した短ズボン開襟シャツが斷然多いのである。南洋では扇子などをつかふと笑はれるといふ。そんな瀰縫的處置で暑さがしのげると思ふのは、まだ南洋ずれのしてゐない證據であるといふわけである。

雨に濡れた坦々たるアスファルトの大道が、間遠に立てられた街燈の淡い光を映して、運河の水面のように美しく光つてゐた。道の兩側の椰子の並木がたまらなく美しい。すーつとまつすぐにのびた幹のはるか上の方に、懐中電燈の光芒に照らし出される十數箇の實、風にそよぐ大きな扇狀の葉が、雨上りの夢幻的な雰圍氣をただよはせてゐる。街は暗いけれども、建物もさすがに南洋の首都らしく、夜目にも近代的で立派であつた。そして、ふつと自動車のヘッドライトに浮上る道ばたの生垣に思ひ切つて赤いブッソウゲの花が、われわれをおどろかせるのであつた。その夜は、久しぶりにビールの滿をひいて、いい氣持になつて船へかへつた。

翌日九時すぎ、今度はほんとうの波止場の方へ上陸する。昨夜上陸したのは、丁度その反對側にある、至極交通の不便なマラカル島の一角であつたのだ。晝光に照らし出されたパラオ港の色彩はさすがに美しく、ちかちかするような鮮かな綠の間から、家の屋根の輕快な色調がのぞいて、何とはなしに氣持が朗かになるような風景である。海岸ぞひの椰子の木が、一本々々

見えるのもエキゾチックであつた。波止場附近の倉庫の屋根が、まるで五月の山のように、新緑の濃淡で、不規則な雲形にぬりわけてあるのも印象的であつた。

われわれが内南洋にやつて來たのは、必ずしも宿願の實現といふわけではなかつたけれども、やはり異郷に來た嬉びといふものは、みんなの共通した氣持であつた。上陸してからのちよつとした道ばたの草や、その草の上にとまつてゐる昆虫や蝸牛にも、われわれの眼が思はず輝きを增すのは當然であるとしても、その他の、目にふれるものは何でも物珍らしくわれわれの心を捕へ、誰もが手帳を片手に、それぞれの觀察眼を鋭く働かしながらあるいた。波止場附近で、泥の中からニョキニョキと氣根を突出させてゐる、マングローヴの奇怪な姿をはじめて見たのもこの時であつた(第八圖版參照)。

この日の豫定は、關係諸官廳への挨拶と、パラオにおける主な施設の見學とであつたが、この町は内南洋の首都だけに、見るべき場所もかなり多く、仲々忙がしい日であつた。上陸して間もなく、昨夜ホテルで泊つた今西隊長とは南洋廳で落ち合つて、一しよに内政部長の話を聞いた。隊長の昔のスキー友達で、京大旅行部の大先輩の一人であゝ榊田商工課長の案内で、物産陳列所を見學した後、商工課員の吉本氏の案内で、水産試驗所、熱帶生物研究所、アバイ(島民集會所)、熱帶産業研究所、と見學をつづけて、最後に郊外の南洋神社に參拜した。歸途、古い島民の部落を訪れた。

パラオの街は、バベルダオブ島からは獨立した小島の上にあつて、島も町もともにコロールとよばれてゐるのであるが、そのコロールの町から南洋神社までは、山の中腹を切り開いて、新しくつくられた參道が坦々とつづいてゐる。今でこそ兩側に並木もなく、野生のウツボカヅラやサトウキビの生えた赤土とバラスの道で、神域にはそぐはぬ殺風景さであるが、これもやがては熱帶特有の快速度の生長によつて、兩側に程よく並木もならぶであらうし、現在增築中の神殿の完成と相俟つて、ここ數年の後には、南の鎭め、官幣大社南洋神社にふさはしい森嚴さが、あたりを支配することになるであらう。われわれは、か

つてニュース映画や寫眞週報で、この南洋神社の鎭座式の狀景を見たのであるが、そのとき椰子の並木の幹高く、南洋神社と大書した大提灯が、たとへ環境こそ如何に變つても、日本民族の不變の傳統をそのままに、高らかに掲げられてゐるのを見て、わが同胞の逞ましい邊疆精神を強く感じさせられたことが、今現實にその社に參拜すると、再び生きいきとわれわれの心の中によみがへつて來た。フロンティーアといふものは、いはば生物的な壓力が、それを阻止しようとするあらゆる異種的なものに對して、常に押し進まうとして觸れあつてつくつた一種の線なのであつて、日本民族の場合ならば、このフロンティーアにおける神社の創建といふことは、大なり小なりその地方において、日本民族がすでにその土地を、邊疆の前進基地として確保したことを示すものであり、卽ち、その地方における民族の種としての主體性の確立の表徵なのである。開拓民族としての日本民族の優秀さは、すでに滿洲などでは完全に立證されてゐる所であらうし、こと南洋においてもやはり同樣に、或ひはそれ以上の生物的な壓力として働いてゐるのが觀察されるのである。

それはしかも一面においては、すつきりした近代諸施設をもつ市街などにみられる文化建設力の優秀さにあらはれてゐるのは當然であるが、もちろんそうした一面、より深い根强さを感ぜしめる所の、邦人定住者たちの、泥を浴びても生きてゆくといふはげしい强靱さを物語る事實も見られるのである。南洋廳の近所の本通りこそ、官廳、郵便局、無電塔、ホテル、百貨店と、堂々たる建物のならぶ近代的街路であるけれども、一歩そこから郊外へ近づいたり、或ひは裏まちへ入つてみると、むしろわれわれとしては、これは支那人街へ迷ひこんだかと疑ひたくなるような、混亂と貧弱さがあふれてゐた。そこでは、店は常に小さく汚いし、道にあそぶはだしの子供たちは殆んど裸體に近く、そこに行き交ふ日本人たちも、それは大部分沖繩縣人らしく見うけられたが、黑い顏色と、その耻も外聞も忘れたような不體裁な服裝とは、たしかに一部の人たちからは顰蹙をかふであらうが、實はこれらの人々の强靱な粘着力こそ、酷暑の環境を征服して、日本民族が着々と大地に建設の歩みをふみし

めてきたその力の、偉大なる一分力をなしてゐるのであらう。沖縄縣出身者たちが、南洋で果してゐる大きい役割りといふものを、迂濶なわれわれは、南洋に來て見るまで知らなかつたのであるが、こうして實際に來てみると、至るところでその强靱無比の開拓力を實證する事實に行き會つたのである。

一たび邊疆の生活の味を知つた者は、中にはその荒々しい生活の粗野な鬪ひに敗れ果て、內地の成熟し、洗練され切つた文化の中へと舞ひもどつて行く人もあらうが、何故かしら、大部分の人は、その人の好むと好まざるとに拘らず、更にフロントへフロントへと押し流されて行くことが多いようである。われわれが熱帶產業研究所を訪れた時に、挨拶に出て來た人は、偶然にも川喜田が數年前に小笠原でいろいろとお世話になつた岡部技手であつた。二人は、はからずもこんな所で再會して、

「お互ひにまた大分南に來ましたね。」

と、一寸傍目にも奇妙な宿命を感ぜしめるような笑を交してゐた。幾年か後に、われわれが更に南の赤道の彼方を訪れる時には、われわれはまた、この內南洋で知りあつた人々の誰かときつと再會することであらう。フロントに住む人ばかりではなくわれわれ自身がそうである。日常の生活は內地で營んでゐるとしても、機會ある度に邊疆へ、邊疆へと、押出されて行くのである。そして、そのわれわれ自身の背後に、ここにもまた一種の民族的な壓力といつたようなものを感じないわけにはゆかないのである。

このような壓力が、樺太あたりの北の邊疆にくらべると、この內南洋のそれは、より强力であり、より根强く感ぜられるのは何であらうか。それはもちろん、兩者の國際的な條件の差が大きく働いてゐるであらうし、現在の、國內の盛り上る强烈な南進熱の反映でもあらう。今や、この事情は全面的に表面化して、パラオ全島は勿論のこと、內南洋全體には「より南へ！」、「赤道を越えて！」、の聲が、外南洋を目指して滔々と渦まいてゐるのであつた。

水産資源は北海ばかりではない。日本産のカツヲ漁獲高の半分は、パラオを中心として取扱はれるといふ。彼ら漁夫たちは百噸そこそこの船で、勇敢に荒浪を蹴つて鰹漁に従事してゐる。それにもまして驚くべき小船を操つて、アラフラ海に眞珠を求めてゆく多數の潜水夫たちが根據地としてゐるのも、このパラオの地であることを忘れてはならない。これらの船は、一般にダイヴァー・ボートとよび慣はされてゐるが、昭和一一年頃には全盛に達して、所謂、「ダイヴァー景氣」を現出するに至り、今コロールの町にある料理屋やカフェなどの、殆んど全部がその時にできたものであるといふ。思へば赤道をへだてて目と鼻の先に、暗黑の大陸ニューギニアが横たはつてゐるのである。ダイヴァーたちがもたらすニューギニアの諸種の情報、殊してそのお土産の極樂鳥など、せまい内南洋から溢れかかつてゐる日本人の血を、どうして刺戟しないでおかうか。今や、内南洋では、原住民よりも日本人の方が、人口が多いのである。しかもその多數は、「投資植民ではなくて移住植民」なのである。そしてその多くが、更に南への移住を目ざして機會を待つてゐるのだ。われわれの會つた島民公學校の校長先生は、談たまたまニューギニアのことに及ぶや、烈々としてニューギニア進駐を語り、それに對處すべき教育の理想を語るのであつた。

進出の對象としては、誰もがニューギニアのみを目指してゐるわけではなからうが、おのづからその地の利よりして、蘭印の西半に對しては臺灣が基地となり、内南洋の人々は、その東半に對して、自分の住む土地を基地に擬してゐるのは當然である。ここまで南下してきた以上は、どうしても赤道を越えないでおかれようか、といふのが、この土地の誰からも聞かされる決り文句であつた。もちろんそうした人々のみながみなまで、確固たる抱負と信念をもつてゐるかどうかは別問題であるが、そのような個々の人の信念などには無關係に、一つの支配的な空氣にまきこまれて、猫も杓子もがやはり強いこの集團意志の形式に參加してゐるのである。とある街角の黑い板塀にも、朱の波線で筆太に傍線を施した煽情的なポスターが、

「若人よ、立て！　蘭印の陽は招く！」

と呼びかけてゐるし、裏街の、煤けた食堂の壁にも、舌代に並んで、赤地に白丸の旗を手にした逞しい青年の像が、

「歴史はめぐる。第二の開闢だ！　民族大移動の秋だ！」

と絶叫する。上層階級の青年層では、南方問題の研究會が組織されてゐて、研究に、講習に、活躍をつづけてゐるそうだが、上の如き南進の空氣は、そのような指導者層のみではなく、むしろ一般大衆の空氣であり、それら大衆の力は、凝集して、今や南方挺身隊なる結社にまで進展してゐた。南方挺身隊は、大工とか、左官、その他種々の職業、特に建設の第一線的役割りを引きうけるべき人々によつて主として構成されてゐて、いざといふときには眞つ先に進出して、建設の第一着手をやらうといふ、威勢のよい存在なのである。食料品店や自轉車屋の店に並んで、「南方挺身隊入隊申込處」と大書した掛看板が、コロールの街には、あちこちに見られるのである。

しかしながら、このように、南へ、南へ、と打ちよせる波にも拘らず、一方からいへば、在南洋の邦人たちの故郷内地へのつながりは、どうしても斷ち難いものにはちがひないのである。日本人は、海外に進出しても、異郷に骨を埋める覺悟の人が少なく、一儲けすれば何れは故郷に錦を飾る了見なので、外國に行つてもその土地の者からは嫌がられるし、移民制限などを食ふのだ、といふことは、われわれの小學生時代には、日本が所謂「人口問題」に惱みぬいてゐた頃に、屢々聞かされた所である。しかし一方からいふと、これは頑強な民族の主體性の主張であり、支那人などと異なる點は、そうした所にあるのだとも考へられはしまいか。もしわれわれの同胞が、移住した土地に同化吸收されてしまつたとすれば、そしてとき折その孫に語り聞かす時にふつと心に浮ぶやるせない鄕愁のほかには、精神的にも實質的にも、故國との交渉を斷つてしまつたとするならば、それらの人々の集團は、たとへ日本人種の系統であつても、もはや日本民族ではないのである。邊疆とはいへ、パラオは幸ひにして内地とは斷えず交渉がつづいてゐる。そして、それだけにまた内地のことを思ひやる機會も多く、一面においては

上述の如き、後顧を知らぬ潑溂たる前進の精神とともに、他の一面においては、やはりこの島にすむ一つの民族集團として、故郷への有形無形の憧憬と連結は、強く斷ち難いのである。事の是非は別としても、彼らは、浴衣を着て、内地からとりよせた門松を立て、お雜煮を食べて暑い熱帶の正月を祝ふのである。物産陳列所の玄關を入つた表面の飾窓に、内海洋の大きい地圖がしつらへてあるが、その上の隅に、辛うじてのぞいてゐる内地の南端に、「祖國本土」と説明が附けられてあつたのが、何氣なしに書かれたのかもしれないが、妙にわれわれの心を打つものをもつてゐた。また、船が、リーフの僅かな裂目を、最徐行でパラオの港へ入つて來たとき、波止場からは、小さいランチや發動機船が、續々とくり出して來たが、それらの船にはどれにも、われわれには奇妙に感ぜられる位の簡單な衣服をつけた男女が、それでも一應の禮裝を着飾つて、或ひはせまい甲板に、或ひは運轉室の屋根にならんで、ハンカチを振り大聲で叫んでゐた。そして、それらの小船は、母親を迎へてはしやぐ小供たちのように、本船と平行して走つたり、前方で旋回して見せたりするのであつた。何れ、本船にのつてゐる知人を迎へに來たのではあらうが、それだけでは割り切れぬもののあることは、それらの小船のうち、委任統治領とはいひながらも、同じ日本の港で、しかも日本の船を迎へるのに、日章旗を高々とひるがへしてゐる船が、幾艘もあつた、といふ事實で示されてゐると思ふ。そしてそれらの心の動きは、單なる郷愁の感傷と片づけてしまふには、あまりにも生々しく、またあまりにも社會的である。

われわれの、内南洋の遍歴は、かくて、今パラオを振り出しに、始まつたばかりである。しかし、南の邊疆のもつ生々しい姿は、われわれがトラック・ポナペ・クサイ・ヤルート・サイパンと巡るほどに、更にその種々相を展開して行つたのであるが、その萠芽は、すでにパラオにおいて、すべて現はれてゐたかもしれない。見聞の氾濫の中を、われわれはしかし再び船へ

かへらなくてはならない。船は、七月二二日の正午に、パラオの港を出帆するのである。

二

パラオをすぎると、それまでは超滿員であつた船室にも、かなりのゆとりができてきた。その前に、洗濯物でも吊しておくと、小一時間もするうちに、すつかり乾いてしまふほどの強い風を絶えず噴出してゐる天井の通風筒の口を、うつかり他の方向にでも向けようものなら、忽ち隣の船客の顏に眞正面からぶつかつたりするので、今までは何かにつけて隨分窮屈な思ひもしなければならなかつたのだが、もうそんな遠慮も要らぬこととなつた。こうなるとわれわれも船室にゐる時間が多くなつて讀書やトランプに時間の大部分を過すこととなつた。パラオ出帆の夜などは、早速船室で上陸土產のシャシャップやパラミツなどといふ、內地では見たこともない奇妙な、馬鹿に大きい果物類の試食會が行はれた(第二六圖版—參照)。勿論その中には椰子の實もあつた。そしてその果汁と、中のコプラとをすつかり平らげてしまつた後の厚い果皮には、誰の卽興か、割箸の三脚がつけられて、われわれの談笑の中心へ、こんどは煙草盆として登場した。

船室から最初の階段をあがると、休憩室の壁に硝子蓋の揭示板があつて、一枚の大きい南洋海圖が張つてあつた。海圖には赤鉛筆で、パラオ丸の航路が大きく三角形に記入してあり、その赤線上に立てた小さい日章旗が、船の現在位置を示すようになつてゐた。しかし船がいくら西に進んでも、この旗は一向に動かうとしない。これはどうも船員の怠慢といふことになりそうだが、實際每日何の變化もない海の上の生活を續けてゐると、その中に何だか本當に、船がいつまでも一點に靜止してゐるかのような錯覺が起つてくるのだつた。加速度を伴なはない等速度運動は、生理的にも身體には感じ得ないわけではあるが、

それに赤道に平行しての、赤道無風帶内の航海は、船に上下運動さへ殆んど與へなかつたから、こんなときには甲板に立つて、船首の蹴立ててゆく波が、船の西側に、目のとどく限りどこまでも、美しく雁行してあとを曳いてゐるのを見て、やつと船が進んでゐるといふ實感が得られたのである。その雁行する波の山をつつーとかすめて、ときどき無數の飛魚の群が飛んだ。そして申し合はせたように、一齊に同じ方向へさーつと傾き落ちて、また海の中へ消えて行つた。

海は毎日、まるで油を流したように平滑であつたが、そうかといつて鏡の面のようにじつとしてゐるのではなくて、それが始終無氣味な、重苦しそうな、のたり、のたりとした波動を續けてゐた。

空は、天氣が案外複雜で、何種類もの、ときには七、八種類に及ぶ雲形が、何層にも重なり合つて、美しい斷面模樣を見せた。そして、全天雲ばかりとか、全くの日本晴とかいふことは、比較的稀で、大てい空の何處かにそのような雲の層序が裸出してゐるのが見られた。所々、雲から水面まで、薄煙色の柱が垂れてゐるように見えるのはスコールであつた。

南の海では、太陽が沈んでからの薄明の時間が、北地にくらべるとはるかに短いので、夕闇が何の感興もなく突然にやつて來て、忽ち暗くなつてしまふような日が多かつたが、それでも、航海中たつた二度ばかり、すばらしい夕燒けの美觀を見ることができた。英國や和蘭の、かつての世界制覇の象徴のように、屢〻畫にかかれてゐる南の海の帆船の、その背景などによく用ひられる、あの鮮かな强烈な色彩は、やつぱり誇張ではなかつた。そして、雲形の多樣さが、更に美觀を助長してゐたことは疑ひない。緋色の積亂雲と、紫金色の積雲との組合はせの强烈さは、北地の霧の海の日沒とは系統のちがつたものであつた。

かつては、畫にある通りに、この夕燒けを背景として、ヨーロッパ人たちの小帆船が、この南の海を縱横に乘りまはしてゐたのである。マゼランが、十六世紀のはじめに、最初に内南洋の島を訪れたときから、今では四百年以上の歲月が流れてゐる。その間、これらの島々は、一つのこらず彼等ヨーロッパ人のものであつた。その航海の冒險記や、印象的な繪畫などが、

如何に當時のヨーロッパ人の勃々たる發展精神に受入れられ、また、更にそれを刺戟したことであらうか。當時はまさしくヨーロッパの勃興期であり、彼等の社會を強く支配してゐたものは、海外發展の冒險精神ではなかつたか。そして南の海の色彩の蠱惑的な強烈さは、とうとうミクロネシアはおろか、ニューギニアや、オーストラリアや、ニュージーランドにまでも、彼等を導き入れてしまつたのだ。

だが、内南洋に關しては、今はすつかり事情が異つてしまつた。われわれは、自己の體も意志も、巨大な日本の船に委ねて商船航路を走つてゐるのである。感謝すべきことには相違ない。しかし、かつてこの海を乘りまはした、あの勇壯な探檢船のロマンティシズムが、民族こそ異なれ、いまわれわれの血の中にも勃々として湧き上る。心配しなくとも何時の間にか目的地にとどけてくれる、このような航海の安易さの中には、どうしても割り切れないもの足りなさが、つきまとふてゐるのはどうにもならない。われわれが、自分の船を、自分自身の意志によつて、思ふ存分乘りまはす時は、しかし間もなくやつてくるであらう。そして、たとへこの夏は、南洋探檢の基礎訓練といふだけに終つても、この次のそうした機會には、われわれは民族發展のほんとうの第一線に立つて、邊疆の八咫烏の役割りを果さねばならない。赤道以南の島々は、今や指呼の間にある。

外南洋への強い意慾、それは、直接の目的や、實現の方法こそ異なれ、われわれが内南洋在住の日本人の眉宇に見出したものも、やはりこの同じ意慾ではなかつたか。しかも、この時、太平洋戰爭の危機は刻一刻と增大しつつあつた。この氣持を反映してか、われわれが持つて來た圖書類をお互ひに見せ合つたとき、まるで申し合はせたように、ニューギニアの地圖があちこちからとび出した。開戰すれば、内地へは歸らずに、このまま挺身隊として、南進しようと覺悟してゐたのだから。

われわれの夢みる、そうした南半球の島々の象徵として、南十字星が、美しい夕燒けも終つてとつぷり暮れた海上に、南の水平線の常に絶えやらぬ雲の斷れ目から、ときどきちらりと姿を見せた。内地ならば、南の空もずつと低くに連なる蝎座は、

ここでは天頂近くに來てゐた。船艙の上にねころんで、檣が、くらい空の中に、黑く塗られた上半身を溶かしこんでゐるのを辿ると、煌々と光るアンタレンスが、船の緩漫な動搖につれて、檣頭からその姿を出したりかくしたりしながら、大きくゆつくりとゆれてゐるのだつた。

月のまだ出ない海を見てゐると、船尾が上下にゆれて、スクリューが水面近くに浮き上るたびに、暗い水面へざざーつと白い泡の奔流が勢よくはき出されて、その中に、美しい金色の螢光を發しながら、まんまるい發光動物の群がりが、まるでシャボン玉のように、次から次へと現はれては、その白い泡の流れにもまれて消えて行つた。月が出ると、船尾の上甲板で、歌好きの森下さんを圍んで、猛烈な二部合唱の練習が始まつた。そして、同じ船に乘り合はせた、木原教室の近藤さんの、きれいなバリトンもそれにまじつた。

歌の最中でも、時間がくると、當番は中甲板へ下りて、氣象觀測に從事した。觀測は、地理學者として、かような遠征隊の氣象觀測の經驗をつんでゐる、淺井さんの指導の下に行はれた。種目は、海洋氣象觀測の型通りに、氣溫、アスマン通風寒暖計による濕度、風向、風力、雲形、雲量、ウネリ、水色、海水溫度、氣壓、ポリメーターによる濕度など、その他に、自記溫度計が一基動いてゐた。當番は、九人の隊員が二人づつ組となつたが、一日六回の四時觀測だつたから、午前二時に當ることもあつた。しかし、かような隊に隊員として參加する以上、それ位は當然の義務であつた—たとへ自分が直接氣象に興味を有してゐようとゐまいと。われわれにしても、もちろん、みんな專門の分擔をもつてゐても、隊の仕事のためには、何時でも誰をも動員できるといふところが非常な强味であつたらう。それにこの觀測の義務は、別にとり立てて共同の仕事といふものを有してゐない、このような船上の生活が、ともすれば恣意的な、個人的放縱の氣分に流れ易いのを引きしめるのに大いに役立つこととともなつたのである。

規律保持のため、それから隊員の健康保持のために、毎朝、起床と同時に、上甲板でラヂオ體操が行はれた。一體、熱帶に入つてから各人の精神的並びに肉體的な健康狀態は、略〻一致してゐて、倦怠感を訴へるとともに、注意の集中が困難で、本などとても長く根氣强くは讀めなかつた。推理力と食慾とが減退し、熟睡することが難しい、といつたこともまたその徵候として數へられるが、その原因として、恐らく船内といふ特殊な生活の影響が、大きく働いてゐたに違ひないのである。ひとは熱帶といへばすぐに酷暑を聯想するけれども、單に氣溫といふ點から云へば、日中でも、三〇度を超えたといふことは稀であつて、船内生活中での最高氣溫は、七月二三日午後二時の三一・八度であつた。これに對して最低氣溫は、七月二〇日の午前六時に、二六・〇度といふのが唯一度あつたきりで、あとは殆んど毎日、二八—九度邊を往復してゐたから、内地の刺戟的な氣溫の日變化にくらべて、この夜の氣溫低下がなかつたといふことが、いく分體に影響してゐたかもしれないと思ふ。熱帶は決して暑い所ではなくて、暑さ寒さのない所であるといふことを、われわれはかくして、既に上陸する前から經驗させられた。その他といへば、船室の不快さや、運動不足や、船の動搖など。しかしそれも、航海の後半や、歸路の航海などにおける一行の元氣さ加減から考へると、往路のこのような變調は、氣候馴化（アクリマティゼーション）或ひはもつと一般的にいつて、新しい環境への適應（アダプテーション）の過程に見られる、單なる一時的現象であつたと解してもよかりそうである。

それよりも、われわれ精神勞働者にとつては、文化的刺戟の缺乏といふことの方が、はるかに重大な影響を及ぼすであらう。そう思つて南洋に關する文獻などはかなり澤山持ち込んだのであるが、上述のようなわけで、船の中では思つたほどに讀書ができなかつた。然るに、パラオ丸のこの航海には、南洋の研究で有名な學者達が、何人も同船してをられたので、われわれが毎朝、それらの人々から二三時間の講義をお願ひできたのは、大變仕合はせなことであつた。中でも、特に南洋を題材としたものをあげると、

南洋と遺傳學……京大農學部助教授　西山市三氏
ミクロネシアの言語について……京大文學部助教授　泉井久之助氏
熱帶の有毒動物……慈慶醫大　羽根田彌太氏
南洋群島の地形學、及びニューギニア旅行談……東北帝大助教授、熱產技師　田山利三郎氏
南洋群島の民族學……東大人類學教室　杉浦健一氏

などといふ講義があつて、南洋ははじめてのわれわれとしては、一語と雖も聞きもらさじといふ緊張ぶりであつた。

まつすぐに南に延長すれば、とつくに濠洲にまでとどいてゐる筈だといふ長い航海も、かくて、われわれは生活の調子を大して落しもせずに、比較的愉快な旅をつづけることができたのである。

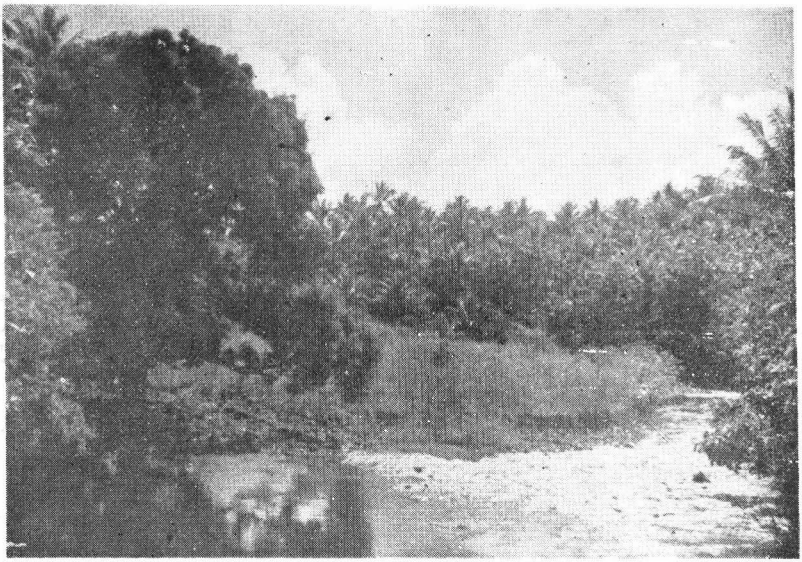
三

船の入港する時は、どの港でもそうであるが、内南洋の島々のように、横づけ埠頭を持たない港ではとりわけ港が活氣を呈して、水面は行交ふ小舟で夜も晝も雜踏を極めるのである。そのような小舟の雜踏をかきわけて、われわれの船は、美事な堡礁に圍まれたトラックの港へ、七月二六日の早朝、靜に入港した。

ランチがいくつも、おしあひへしあひして我先にタラップに横づけしようとしてる間に、島民たちが、ひらりと本船にとび移つて自分等の關係者たちの荷物をうけとると、どんどんランチへ運びこみはじめた。その内島民や朝鮮人の荷揚人夫たちも、わつと乘り込んで來て、船内はそれらの白いのや黑いのが入り混じつて一時にどつと賑かになつた。

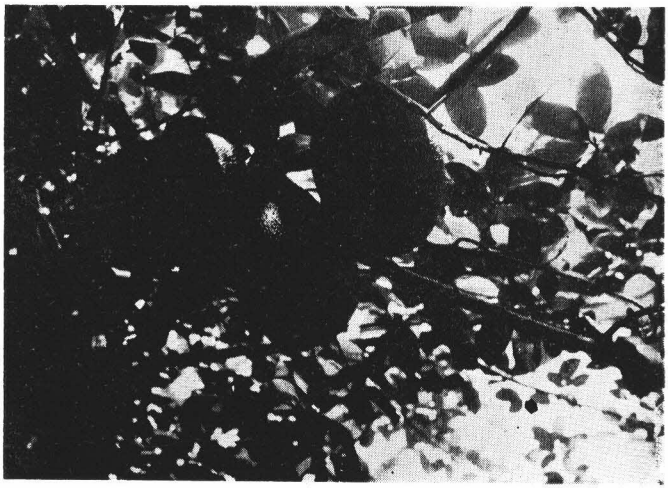
荷揚人足にやつて來る島民たちは、大てい支廳からの命令に依る徵用人夫で、この仕事は、すてておけばこれといふ勞働もしないしまたその必要もない彼らに、勤勞の訓練を與へる重要な契機をなしてゐる。彼等は大てい上半身は裸體であるが、半ズボンをはいてゐるものが多かつた。勿論足はむき出しで地下足袋ずらはいてゐるものは一人もない。唯時々島民中のモダンボーイがへしやげた古帽子を頭にのせてゐた。中には花をつづつた美しい冠を、頭かざりにしてゐる伊達者もゐた。それよりもわれわれの目を瞠らしめたのは、その肉體に、所きらはず彫りこまれた珍妙ないれずみであつた。昔は、上膊や、すね等に整然と平行して、正しくえがかれた直線だの、電光形などの、幾何學模樣が、たつとばれたのであるが、四〇歲までぐらゐの比較的若い連中は、そのような傳統をさらりとすてて、自由奔放な彫刻を施してゐた。その場所は、調和を度外視したもので、胸の片隅であつたり、或ひは、腕の中央であつたり、全然出たら目であるし、その圖案に至つては奇想天外で、例へばローマ字が一字彫つてあるかと思ふと、名前らしい綴りをなしてゐるのもある。星形があり、十字があり、ジヤックナイフもある。中でも愉快なのは、日章旗と軍艦旗が交叉した下で、白い手と、黑い手が、しつかり握手してゐる圖案が胸の中央に展開してゐるものであつた。

これが果して島民自身の發意によるものかどうかは知らないが、日本の占領當時の彼等の氣持ちが推察されるような氣がして、ほほえましく感じられた。もつとも島民のいれずみには、日章旗以外にも旗の模樣は少なくなく、また握手だけの構圖も多いし、上の例は、その樣な島民の好みに合つた圖案の、偶然的な集合にすぎないかもしれない。一般に原始民族のいれずみといふことは、單なる裝飾として以外に自己の所屬するトーテム團體の象徵とか、身體的成熟の印とか、その他の社會的或ひは、宗教的な意味をもつてゐる場合があるといふが、たとへここの島民の古いいれずみがそのような意味あひのものであつたにせよ、上述の妙な圖案が、すでにそのような意味を失なつてしまつて、外來文化の影響の下に、固有の習俗が崩壞しはじめ、



マンゴー

朝別れたときは原生林中を奔流してゐたキチー川も、午後には椰子林をぬふ靜かな流れとなつて海に注いでゐる。水浴場らしい河岸にはマンゴーが濃い影をおとしてゐる。



1. パラミツ
著名な熱帶果實の一つであるパラミツは、パンノキと同屬であつて印度原産といはれる。その人頭大の果實は時に幹生果として太い幹の側面に直接生ずることがある。

2. ナンヨウスギ
ナンヨウスギ屬 Araucaria は南半球に産する針葉樹の代表的のものであつて、南米、濠洲から東印度にまで分布するが、その特異な樹型はわれわれの針葉樹の概念から大分違いものである。

形骸化したした徴候であることは間違ひない。事實、それらの次に來る年代に屬する、更に若い島民の間では、すでに、そのような形骸化したいれずみすら姿を消して、天然のままの淺黑い肌を保有してゐたのである。

ランチの小さい船室の前を黑い彼等の肌が動きまはるのを眺めて、やがて棧橋に上陸すると、その棧橋にも、多數の島民たちが、快活に歌を合唱しながら嬉々として働いてゐた。

トラックは內南洋における要衝である。橫濱—パラオ—ヤップ—トラックを連ねる西廻り線と、橫濱—トラック—ポナペークサイ—ヤルートを連絡する東廻り線の二つの內南洋航路が、丁度カロリン群島の眞中にあるトラックで交叉する。港はいくつかの島をとりこむ大きい見事な堡礁の中に抱かれて、天然の良港を形成してゐた。かく重要な港でありながら、その町の有樣は、田舍くさくて、貧弱なものであつた。道路は、雨の多い南洋では舗裝されてゐることが內地以上に必要なのであるが、此所では、町を縱貫するただ一本の主要道路が舗裝されてゐるのにすぎず、一歩橫道に入ると、たちまちラテライト化した眞赤な泥土の氾濫で、甚だしく不愉快なものであつた。パラオの立派な町なみを見たすぐ後のこととて、著しく見劣りを感じたのはやむを得ない。ただ海岸沿ひの通りに立並んだ、薄汚ない店屋にくらべて、支廳のみが、それも決して美しい建物ではなかつたけれども、綠の丘の上に、鳳凰木の眞紅な花に彩られ、黃褐色の屋根を、かつと照る陽にかがやかせて、何とはなしにロマンティックな香を漂はせてゐた。

われわれは島民公學校を見學に行つた。トラックの町には珍らしく美しい建物で門を入るとせまい運動場があり、正面に一棟の校舍がある。行つた時には、丁度授業の最中であつた。內南洋の公學校は、本科と補習科にわかれてゐて、滿八歲で本科に入學する。本科三年は義務教育といふことになつてゐて、それ以上の教育を希望するものは、更に二年の過程ををさめるのである。義務制とはいふものの、設備不足で收容力も少なく、この島では、現在適齡兒童の約二九パーセントが就學してゐる

にすぎないといふことであつた。朝は雞とともに起きて、仕事はなるべく早くに片づけてしまひ、日中は休んで晝寢をする島民の習慣が學童にも影響を與へるのであらうか、その出席率はわれわれの常識を逸脱した、ひどいものであつた。學校とてもその點には注意して、早朝七時始業、學習は午前中のみとし、午後は作業といふことになつてゐる。その午前中のみの授業すら、室内に閉ぢこもつて智的な訓練をうけることに全くなれてゐない彼等にとつては、何か落着かぬものであるにちがひない。その學習ぶりは面白いものであつた。われわれの姿が窓際に現はれるや否や、彼等の黑い顏と白い齒が、一齊にこちらに向き、もはや授業は忘れ果てたようである。島民の助教が、しきりに「學校をやすむ子供はいけない子供です。毎日學校へ出て來る子供はよい子供です」と抑揚のない日本語で修身らしい講義をつづけてゐるのだが、教室の中は、まるでそんな講義とは無關係に動いてゐるので、忽ち、あちこちで大混亂がまき起つた。兒童といつても、その年齡は、ずゐ分變化に富んでゐて、八・九歲の小さい子供から、もう子供と呼ぶのには氣のひけるような大人びたのまでが、一つの教室にぎつしりつまつてゐた。ことに女生徒は、一四・五にもなると、もうすつかり成熟し切つた感じで、これでも兒童かと不審な氣がした。下級生の教室は更にすさまじいものであつた。ここでも下駄ばきの島民の助教が、鞭を片手に教壇につつ立つて大聲でどなつてゐたが、教室中は秩序もなく、片すみで二人が席を離れたかと思ふと、忽ちとつくみ合ひがはじまる。先生がとんで行つてひき分けてゐる間に、また他の隅で一騷動起るといふ有樣。それでもその間にそんな事件も知らぬ顏で、次々と生徒達が教壇に立つて「そして」や「それから」などの接續詞の無暗に多い日本語で、昨日あつたことについて、「話し方」の稽古をしてゐた。

學校の授業は、勿論すべて日本語で行はれてゐて、歌ひ方、書き方、などの中でも、特に話し方の授業が重要視されてゐるらしい。蘭印等では、周知の如く、公用語はマライ語で、オランダ人自身がマライ語を學び、島民には一切蘭語教育を施してゐないし、この内南洋に於ても、獨逸の方針はそれと同樣であつたのに對して、日本の異民族統治にあたつては、つねにその

正反對が行はれてゐるのである。殊に南洋では、島民語は學校では一切使用せず、學校はさながら日本語學校と言つてよい。實際校長の話によつても、公學校教育の第一目的は、日本人のよき手助けたり得べき、日本語のわかる島民を多數養成することなのである。そして秩序といふことを知らぬ子供達に對する、日本人の先生たちの地味ではあるが根氣のいる教育の結果、今ではどんな離島の村へ行つても、大てい一人や二人は日本語のわかる島民がゐるといふ狀態にまでなつたのである。

翌日、船はまだ碇泊してゐるので、案内もなく、三四人で島民の生活狀態を見に行つた。

主として日本人の家からできてゐる町の中を歩いてゐたのでは、島民の姿は、目についても、彼等の住居は、一體どこにあるのか、さつぱりわからなかつた。われわれはその家を求めて、いい加減に見當をつけて林の中の小徑にふみこんで行つた。海岸から二三町も入ると、椰子とパンノキの間がくれに、ぽつぽつと、目指す島民の家が見え始めた。日本人は、家をたてる時には、とりあへず近所の木を伐り拂つてしまふのであるが、島民は決して木を伐らない。むしろ鬱そうとしげる樹木を天然の日よけに利用してゐて、家の軒から、一尺とはなれぬ所に生えてゐる椰子は、それ自體がすでに殆んど家の一部をなしてゐた。家そのものも、低い破風屋根や、家の三方をかこんだ壁などは、自然のままを椰子の葉であつさりと葺かれてゐた。室内は、われわれの見た範圍では、どの家も一間きりで、その半分ばかりに、地面から二三尺の高さに床を作り、その上にござを一枚しいて寢起きしてゐた。室内の半分は土間で、椰子の葉が敷いてあり、そこには半ばこはれた釜や、鍋などの簡單な炊事具が放り出してあつた。

家の一方は、大てい開け放しである。炊事は、家のすぐ前で行はれてゐた。家の近所には家畜小屋があつて、その中には豚がひしめき合ひ、悪臭を發散してゐた。それに稚いうちに落ちてしまつたパンの實の腐敗臭や、島民の家内[illegible]から[illegible]る匂ひなども入り混じつて、家の周圍には一種の異國的な臭氣がたちこめてゐた。地面におちて腐敗したパンの實には、おびただし

い蠅がたかつてゐた。

また海からはかなりの距離があるのに、カヌーを引ぱり上げて、軒下に入れてある家も幾つか見うけられた。最初に訪れた家では、中年の女が一人、入口に背を向けて晝寢をしてゐたが、大聲で呼びかけると、起き上つてお追從笑ひをした。「男たちはどこへ行つたか？」とか「仕事はどうか。」とか、いろいろ話しかけてみたのだが、殆んど日本語を解しないらしく、いい加減に「はい」とか「うん」とか、返事をするばかりであつた。立去らうとすると、その女は、室の片隅にあつた丸い鑵の中から、卷煙草をとり出して口にくはへた。その煙草の眞白い紙の肌が、何の家財道具もない簡易生活と、妙にちぐはぐな感じを與へた。次の家では、若い女たちが、數人の子供を抱へて、やはり晝寢をしてゐた。今度は日本語もかなりわかる娘がゐて、われわれの質問にこたへた。どこのうちにも、さつぱり男たちが居ないのは、徵用勞働に出てゐたのである。この日は日曜日だつた。だからわれわれは、彼等の上に、すでに彼等の奉じて來た基督教的戒律より以上の強い力がはたらきつつあることを知つたのである。女たちはそれでも習慣通りに晴着をつけ、ふだん着は屋内にはり渡した紐にかけられてゐた。家の不潔さにも似ず、女たちの服裝が案外に清潔で、華やかだと思つたのは、そのためであつた。もつとも家の中では彼女らも、腰卷一つでゐる事が多い。どこの家を見ても、家財道具がわれわれとしては納得の行きかねるほど少ない。この家では小學生用の讀方帳が一冊床の上に投げ出してあつた他には、化粧用の髮油の瓶が異彩を放つてゐた。それから壁には、トラック語で說明を書いたキリスト像つきのカレンダーが掛かつてゐた。「誰から貰つたんだ？」と聞くと、娘は、「教會からもらつた。」と美しい卷舌のラの音を強く發音しながら、ぶつきらぼうに答へた。

島民の家も、しかし、必らずしもこのようにみすぼらしいものばかりではなかつた。中には、總床附で緣側もあり、ガラス窓や、扉もついてゐるといふような家があつて、その居住者が、ほんとうに純然たる島民なのか疑問に思はれるぐらゐであつ

た。その家には、その他流し場や、洗面器も用意されてゐて、入口には、「夏島、ペニヨル村二〇號」といふ表札らしいものさへでかかげてあつた。一般に表札とはいへぬまでも、家の前の椰子の幹に、「ベリルック村オセニムー」だとかKUSTAPだとか彫りつけて、何らかの表示をしてゐるものは、少なくないようであつた。

このように一通り島民の住居だけを觀察しても、その生活程度には、種々様々の段階のあることが看取される。云ひかへればそれは外來文化の導入の過渡期において現はれたいくつかの段階である。そして衣食住の何れの點についてみても、急速に島民の生活が變化しつつあることはよくわかるのである。女たちは、昔は男と同様に腰蓑姿であつたといふが、そしてヤップ島のみに、現在もなほそうした姿が見られるそうであるが、今ではすでに全部が簡單服を着てゐる。しかもその服は、スペイン文化の影響そのままに、飾のレースが、依然としてくつついて居り、スカートの部分は、布の不經濟にも拘らず、數多い襞でかざられてゐるのである。同様の形式はトラック以外でも、後にクサイでも觀察された。しかしポナペでは、そのような形式は、昔は流行したが、今ではもうすつかり姿を消して、より簡素なより經濟的な形式へと變遷してしまつてゐるのである。かように簡單服が全盛を極めてゐるにも拘らず、彼女たちが自宅においては、前述の如く腰卷一つでゐることが多いといふのは、材料は變つても、やはり昔の腰蓑時代の遺風を傳へるものであるかも知れない。所謂未開社會の研究といふものはその固有文化の研究である場合が多いから、從つて固有文化が外來文化の影響の下に次第に變貌しつつあるといふことは、研究者にとつては、むしろ喜ぶべき現象でないかも知れない。けれどもわれわれにすれば、かかる推移の狀態を眼のあたりに見得るといふことが、また却つて興味深く感ぜられたのである。

島民の家は、殆んどわれわれの觀念における部落を形成してゐない。林の中に、あつちに一軒、こつちに一軒といふ風に散在してゐて、その間は、山の斜面につけられた一尺幅ぐらゐの小徑で連絡されてゐるにすぎない。そのような徑で、時々島民

の女たちとすれちがふと、彼女らは、おづおづと道を讓つて、「コンニチワ」と挨拶した。彼女等のむき出しの脚に、ときどき火傷の跡のような班點を認めたが、それは皮膚病の跡であつた。棧橋にゐた男の中にも、足や腕に皮膚病の形跡があるものを見かけたが、それが有名なフランペシアであるかどうかは素人のわれわれには判斷できなかつた。しかし一人、明らかに象皮病で片足が太くなつてゐるものを見た。このようないくらかの例を除くと、われわれの出あつた島民の大多數は、むしろ小麥色の健康そうな肌をつややかに輝かせてゐた。頭髮にしても、男は子供のうちからきれいにわけて、きちんと調髮してゐるのが多く、女は大てい輕くウエーブした髮に、椰子油か何かをつけて、當時濡れ髮のように美しい長い髮を束ねもせずに肩から胸にまわして、乳の上に垂れさせてゐるのが多い。男女とも目鼻立ちも整つてゐる方で、殊にその眼はぱつちりと大きい。姉妹らしい二人づれが、その長い髮には、眞赤なブッソウゲの花飾りをつけ、揃ひの水色の地に白い水玉模樣の入つた長いスカートを、左手の指先きでちよいとつまみ上げて、漁獲物の入つた籠を運んで濱を歩いてゐるさまなどは、仲々いいものであつた。

トラックへ入港するころ、われわれの歸航の豫定船である笠置丸が、都合で缺航になるといふ情報が入つた。南洋航路は、日本郵船の獨占航路で、船は一ヶ月に一回しかないから、もし笠置丸の代船が就航せぬといふことならば、次は九月末の横濱丸まで待たなくてはならない。

淺井、池田、秋山、松森の四人は、十月になつてから歸るといふことは事情が許さなかつたので、このままパラオ丸で一足先きにかへることとなり、殘るものの方は時間の餘裕が出來たから、それでは全員揃つてパラオ島でポナペ以東の島々、クサイヤルートまで旅程をのばそうといふことに話がきまつた。

四

からりと晴れわたつた淺黄色の空、その明るく美しい空の一角に、何事か曰くありげにわだかまつてゐる白い雲。そしてその雲の下からは、なだらかな線の斜面がなめらかにすべり下つて、さえた青空を背景に快い線をえがいてゐる。その柔かい曲線の上につづいて、雲の下緣には、これはまた全く平らかな肩の線が、のびのびと横につらなつてゐる。大海原の眞只中に、どうしてこんな大きいものが、と思はず讃嘆の聲をあげたくなるくらゐに、山は、堂々と裾野を擴げ肩を張つてゐた。その上に、山を包む綠の衣も、思ひなしか今まで見た二つの島にくらべるとはるかに厚つぽく、重々しく落ちついてゐるように見えた。船はポナペの島コロニア灣へ投錨した。七月二九日の朝であつた。

始めの豫定ならば、この山が見えると同時にわれわれの船の旅も終りを告げたであらう。しかし、すでにヤルートまで行くことにきまつた今では、やがては數十日の生活をするはずのこの島もパラオやトラックと同じように、行きずりの寄港地の一つとして、妙なよそよそしさを感じながら、それでも迎へにきた南興のランチで、とにかく第一回の上陸を試みることになつた。

島の最初の遠望が、われわれに與へた好感にも拘らず、碇泊地點から岸まで四〇分も費して、やつと上陸したその時の感じは、決して快いものとはいへなかつた。ポナペの都、コロニアの、東の町外れはコロニア灣に流入する筑波川が、たえず山の方から運んで來る褐色の泥水のために、灣の中は南洋の海にも似合はず汚なく濁つてをり、氾濫の時に同じ川から押し出されて來た、比重の重い材木が海面にほんのちよつぴり眞黑な顏を出して、幾本もぶかぶかと流れ漂うてゐた。岸に近づくと、水

は泥と、油と、町の排水とで、益〻汚染の度を増し、その上鰹の加工工場から流れ出たらしい魚の腸が、まるでカツヲノエボシのように白くむくれて、醜い姿を波間にさらしてゐた。棧橋は傾きこわれて、早く修繕すればよいのにと、他人事ながら氣をもませる。その危かしげな棧橋をわたつて、南興の事務所の裏から、未完成の鰹節や、薪などが、雜然と入り亂れて積み重ねられた工場の間の、せまい泥道をぬけると、はじめて町らしいはゆるコロニアの海岸通りへ出た。

單調な海の景色に飽きたわれわれは、一寸した事物に對しても、やはり神經質なほど敏感になつてゐたのかもしれないが、上陸の時に一度抱いた不愉快さは、初印象を重んずる氣分屋のわれわれには、かなり後まで影響せずにはおかなかつたであらう。海岸通りへ出てみると、町は雜然とはしてゐたが案外に賑やかであつた。コロニアの町は海岸通りをそのほんの一部分として、それより南の臺地の方に、かなりの廣い面積を占めて展開してゐた。また海岸通りと直角に數本の廣い街路が、美しい椰子の並木を伴なつて、眞直ぐに走つてゐた。その街路の一本は、町の中央を貫ぬいて、ポナペ支廳へとつづいてゐた。

支廳の前を過ぎて、われわれは熱帶産業研究所ポナペ支所を訪れた。

そこでは所長の星野氏に代つて、われわれが後ほどいろいろとお世話になつた江川技手が、案内をして下さつた。ポナペの熱研支所が、内南洋には數少ない研究機關中でも特に重要な存在たる南洋廳熱帶産業研究所の、各主要島に配置された支所の一つとして、發足したのは大正一五年のことである。以來、地方産業振興のための基礎的研究に、多大の努力が傾倒されてきた。現在の同所の主要研究事項は、次の二つであつた。即ち、第一に、今まで常に内地その他に依存をつづけて來た在住邦人食料確保のための、米の適種試驗である。病害・虫害・雨量その他の氣候條件、土壤條件などの多くの困難を克服して、略〻適當な品種の選定も出來て、今では、一朝事ある際、外部からの食糧補給が絶えても、自給自足ができるだけの耕地も豫定されてゐるといふ。春木村の移民地においては、すでに以前から水田ができてゐるし、それも遠からず大擴張の豫定であるといふ

ことであつた。第二には、ドイツ時代、この土地にあつた植物園で行はれてゐた研究の引きつづきとしての、藥用植物の栽培研究である。デリス、吐根、規那等がその中にふくまれてゐる。中でも吐根は、内南洋中でもポナペが最適であるといふ。その外に、ジュート、サイザル、ゴム、ヴァニラなどの有用植物や、マンゴー、文豆、溫州などの果樹の栽培も行はれてゐた。研究所の建物の裏は、廣い植物園と試驗圃場になつてゐた。一わたりその中を見學したが、果樹園には、枝一面に實をつけた柑橘類が、よく手入れをされて整然とならんでゐる。鐵條網をめぐらした一角に、果物の女王、マンゴスチンが植わつてゐたので、われわれも早速その一つを御馳走にあづかつた。

その日は夕食を陸ですませてから、熱研でもらつたランサと呼ばれる可愛らしい木の實を、どつさりお土産にもつて、船へかへつた。

とつぷり暮れたコロニア灣を靜かに走るランチの上から沖合を見てゐると、灣の中ほどに横たはる廣大なマングローヴの島かげから、不夜城のように煌々と電燈をつけてゐるパラオ丸が、水面にきらきらゆれる明るいかげを映して、暗い闇の中に美しく浮び上つた。ポナペでは、荷揚する貨物が餘程多いらしく、晝夜兼行で作業をしてゐるのである。それでも結局出帆は八月一日になるといふので、われわれは翌日から二班に分れて、島の最高峰への登頂と、春木の内地人移民村視察とに、何れも一泊旅行を試みることとした。

島の最高峰は、地圖にはナヌカワート山と記されてゐたが、島民たちはナナラウトと呼んでゐる。ナナは山、ラウトは大きいの意である。標高七八七米、島の略〻中央に位置し、筑波川、キチー川その他の、この島の主要河川はこの頂きに發源する。池田、松森、秋山、吉良、川喜田の五名は、翌日の最初のランチで上陸し、南洋起業會社の援助の下に、優秀な島民案内ルカシーを得て、筑波川中流の同社の發電所から伐材小屋ナンピールに至り（第一圖版參照）、その夜はそこに一泊、翌日は殆んど

道のないジャングルの急斜面をよぢて、無事、ナナラウトに登頂し、途々植物や動物に關して多大の收穫を得て、夜おそくなつてから船へかへつて來た。山地の景觀及びナナラウト山頂の狀景については、後章で述べるはずであるから、ここでは記事の重複をさけて省略しなければならない。

一方、淺井・中尾・梅棹の三人は、殖産課員の案内でジョカージ村の春木移民地に向つた。コロニアから春木までは、陸路八粁、悪いながらもトラックを通ずる道路が開設されてゐて、ときどき物資輸送の車が兩地を連絡してゐたが、折悪しくこの日は車が出なかつたので、われわれは徒歩で出かけた。コロニアの町を出外れると、よく手入れの行きとどいた、樹齢の若い椰子林が、美しく兩側にならんでゐる。しかし間もなく、道は、海岸平地を離れて、次第に山に近い高臺へとうつり始めた。春木の村に入る前に、われわれは島の西北に突出するジョカージの半島を横斷しなければならないのである。

ポナペでは、全島をとりまく島民所有のココヤシ林を除くと、その農産物は、二つの大きい地域に集中栽培されてゐる。その一つは、東海岸のマタラニーム村で、そこには南洋興發の廣大な甘蔗畠と、更に少し山手には南洋貿易の大きい椰子林がある。他の一つが即ちこのジョカージ村で、今われわれが訪問しようとしてゐる春木村の移民地をはじめ、「わかもと」會社のキヤッサバ栽植地、南洋拓植の野菜園などの事業地がここに集中してゐる形であつた。第一の小さい峠をこえると、既にその事業地帶の先鋒として、南洋グリコの農場が展開して、山の中腹を行く道から、海岸眞際のマングローヴに至る間の、かなり廣大な臺地を、ギネア・グラスの美しい綠の波ですつかり埋めつくしてゐた。道は、その農園と、すぐ東に連なる中央山地の斜面との間を縫つて、いくつも小起伏を上下しながら、蜒々とつづいてゐた。このあたりの景觀は、こんなちつぽけな島の中とも思へぬほど雄大で、大陸のどこかにでもありそうな氣がして、すつかりわれわれを喜ばせた。ギネアグラスの畠につづいて、最近伐材したらしい荒れ果てた廣い谷の斜面があらはれた。伐材の跡に火をかけたらしく、燃えのこりの植物の殘骸が黑黑と

地面を蔽うてゐた。朝からときどき霧雨を降らしてゐた空から、またもやぽつぽつと降りはじめてきた細い雨滴が、海岸から吹きつける風にのつて、谷間を吹き上つて來、あたりの景色を益〻蕭條たるものとした。代りのこされたトオンの稍に、可愛いパパイヤガラスが二三羽、翼を休めてゐる。やがてわれわれは春木村の入口の峠に達した。

峠の上からは春木の村が一望のうちに見わたせる。東の中央山地の大きい山脈と、西のナーナ・パリキールの低い連丘にかこまれて、盆地の底に春木村は別世界のように美しく横たはつてゐた。峠附近にはじまつて、村の中までも點々と、短い羊齒に蔽はれた綠の天鵞絨のような小區劃が散在し、その間にはさまれて、とんな赤土の火山島にあらうとは豫期しなかつた米田が見える。細い條線のならぶやや色の異なつた區劃は、パインアップルの畑か。そして、田んぼの背後に、象牙椰子の木立ちにかこまれて、すつかり內地風の農家の屋根が見えた。峠に休んでゐると、後から黃牛に二輪車を牽かせて峠をのぼつて來た女が、われわれを案內してくれる殖產課員を認めると、見知り越しらしく髮にまいた手拭をとつて、

「あら、けふは自動車ぢやございませんの。どうもお天氣が惡くなりまして御苦勞さまでございますね。」

と、しばらく四方山話をはじめる。上半身は簡單服だが、美しく洗濯したモンペ姿やその話しぶりなどを見てゐると、まるで內地のどこかの山村に來てゐるような氣になつてしまふ。だが、ふと彼女の背後の山の斜面に目をやると、さんばら髮をふりかぶつたタコノキが數本、羊齒地の上につき出てゐて、此所は內地ではなくて、南洋だよ、と注意を促した。女につづいて上つて來た農夫は、これも內地風の農民姿で、水牛をひいて峠を下つて行つた。われわれも、それに續いて、吹きつのる風にヘルメットをおさへながら、廣い峠道を村へと下つて行つた。その夜は、春木村の南の外れにある、「わかもと」農園のキヤッサバ加工場の倶樂部で泊めてもらつた。

翌日はわれわれは、「わかもと」の工場を見學した。工場といつても、二三十人の島民が、この附近一面に栽植されてゐるキ

ヤッサバの泥まみれの根を切りきざんで、粗末なかまどで乾燥してゐるにすぎなかつた。やがてこれが内地へおくられると、美しいタピオカ澱粉と變り、「わかもと」の原料になるのである。「わかもと」を辭してから、海岸よりの南拓の農場を訪れ、午すぎに再び春木の中心部落へとかへつて來た。

春木村といふのは、島語の地名、パリキールの當て字である。北海道出身者をも數家族まじへて、邦人の移住農民が始めてこの地に入植したのは昭和四年のことであつた。そしてこの植民は、南洋における邦人の農業移民の可否を檢すべき重大な實驗であつた。植民當時の慘膽たる苦心は、どこの移民村でも共通であらう。それに當時は、コロニアと春木をむすぶ道路も、山越えの細い間道があるだけで、苦心してつくつた野菜類を、コロニアの町に賣出すためには、眞夜中から起きて、荷物を肩に山ごえで行つたものだといふ。

「それはひどいものでございました。折角内地からとりよせた野菜の種が、どれもこれも育ちませず、明日の食ふものにも困ることもたびたびございました。そのうちに、ワイルにかかる者もたくさんできまして、醫者にかけるにも運んで行く道はなし、そのまま死んでしまふ人も何人もありました。食ふものはたくさんある、着物も要らぬ、と聞いてやつては參りましたが、こんなことなら八丈島の故郷の方がどれくらゐ樂なことか、ああ歸りたい、と幾度思ひましたことやら。」われわれの立ち寄つた沖山家のお婆さんは、當時のことを偲んでしみじみと述懷した。だがそれも昔の思ひ出である。今では耕作も順調にすすんで、そのうち幾戸かは水田を所有するに至つてゐる。家屋も、内地の農家に劣らぬものが立ちならび、村の中心には美しい駐在所が建ち、道かどには里程を示すペンキ塗りの道標がたてられて、昔の山越えの當時には思ひもよらなかつたであらう立派な道路が村を縱横に貫ぬき、その上を野菜を滿載したトラックが、コロニアにある春木村共同販賣組合の賣店へと走つて行く。春木移民地の將來には、まだまだ多くの重大な問題がのこされてゐるであらう。しかし彼らの奮鬪によつて、南洋におけ